みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Migration and Family Structure in Soninke Society

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三島, 禎子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004171

ソニンケ社会における家族の連帯と規模
——出稼ぎをめぐって——

三　島　禎　子*

Migration and Family Structures in Soninke Society

Teiko MISHIMA

The purpose of this paper is to discuss how the Soninke family adapts to the socio-economic conditions surrounding their society by paying special attention to family size and structures.

The Soninke society along the Senegal valley has been placed outside the main stream of development policies adopted by the central government since the colonial period. This is a major reason why twenty to thirty percent of one village have been forced to emigrate to France. Almost all the emigrants are male, and they live in France without wife and children. Remittances from the emigrants are used not only for the expenditures needed to sustain the daily life of the family but also for the common expenditures needed for community development in the village. Today, emigration has become essential for the Soninke people to live on in such a depressed region.

The migration observed in Soninke society has been maintained by large families and their ties. Simultaneously, it is confirmed that family structures are adversely influenced by the migration itself. The migration to France, with its completely different customs and culture, cannot continue without the cohesion of the emigrants. It is observed that the traditional age systems and class relationships seen in the village are brought into France. On the other hand, it is confirmed that the status of head of family has been gradually enforced due to continuous migration. The patriarchal system seen in Soninke society becomes a major element in producing families of twenty two point four (22.4) persons on average, as surveyed at the village of Gandé. When the actual

* 国立民族学博物館第3研究部

Key Words: migration, Soninke, Senegal, family structures, family nucleus (noyau familial)
キーワード：出稼ぎ，ソニンケ人，セネガル，家族形態，家族核

conditions of the large families are clarified, using the three basic components of "compound (concession)", "household (ménage)" and "family nucleus (noyau familial)", the following five family types are revealed, namely;

1. mononuclear family, : a couple + single lineal descendants (+ a lineal ascendant + other single relatives),
2. expanded mononuclear family, : 1 + at least one single collateral relative,
3. polynuclear family, : 1 + at least one family nucleus of lineal relatives,
4. collateral polynuclear family, : 1 + at least one family nucleus of collateral relatives,
5. expanded polynuclear family, : 3 + 4.

It is observed that the emigrants come from comparatively large families, e.g. collateral polynuclear family or expanded polynuclear family, and that in such large families there is a tendency for the average age of the head to be high, and further, that those families often belong to a lower social class.

The members of a large family live in the village and the place where they emigrate, and their relations are formed as strong ties among the family members. However, this kind of family is not the traditional and typical one seen in Soninke society in the past. Rather, it must be said that it has been newly formed by contemporary socio-economic conditions. In addition to this, with respect to changes in family structures in the future, the most interesting thing to observe will be changes in the economic and social power of men in the family. It is, in short, to be determined by the power relations between the head of a family and the emigrants.

問題の所在
Ⅰ　ソニンケ社会
　Ⅰ-1　移動の民
　Ⅰ-2　身分制にもとづく社会
　Ⅰ-3　カギュンの役割
Ⅱ　ガンデ村の概観
　Ⅱ-1　その成り立ち
　Ⅱ-2　経済・社会状況
Ⅲ　出稼ぎ
　Ⅲ-1　村の人口構成と人々の移動
　Ⅲ-2　経済活動としての出稼ぎ
Ⅳ　家族の分析
　Ⅳ-1　用語の定義
　Ⅳ-2　「家族」の規模
　Ⅳ-3　「家族」の類型
　　Ⅳ-3-a　類型の定義
　　Ⅳ-3-b　類型別にみた「家族」
　　Ⅳ-3-c　家長のタイプ別による類型
Ⅴ　「家族核」をめぐる分析
　Ⅴ-1　中心と周辺
　Ⅴ-2　「家族核」を形成する者
　Ⅴ-3　「家族核」の社会・経済上の営み
Ⅵ　「家族」に関する総論

問題の所在

サハラ以南のアフリカ諸国が独立を経て30年以上が経過した今日，この地域をとりまく社会・経済的な環境が悪化していることは周知の事実である。セネガルでは植民地時代にはじまった落花生の過剰な生産によって土壌の急速な劣下がすすみ，食糧生産システムの基盤がくずれ，さらに70年代から相次いでサヘル地帯をおそった干ばつで農業の危機は顕在化した。そして農村から都市への出稼ぎが，人々の生活パターンに入り込んでいった。

出稼ぎは人口学的，および経済学的な観点から論じられることが多い。人口集中と過疎，都市化にともなう都市インフラの不足と都市の社会的機能の麻痺，労働移動とそれによる雇用構造および経済構造の変化など，マクロな視点からみた出稼ぎの影響が主なテーマとしてとりあげられている。そこでは出稼ぎという社会現象がおよぼすどちらかといえば否定的な側面が描き出され，出稼ぎ民自身や送り出し社会のすがたはあらわれてこない。しかし出稼ぎは，生活の必然性から生まれた人々の自発的な選択である。今日，農村をとりまくさまざまな状況に対して，人々が出稼ぎをとおしてどのように対応しようとしているのか，その主体的なうごきに注目することが重要ではないかと思われる。

都市への移動は，サハラ以南アフリカに共通している経済の停滞とそれにともなう労働需要の減退によって，かつてほど魅力的ではなくなりつつある。出稼ぎに来ても，農村に残った家族の生活を充分に支えるほどの稼ぎは得られない。従来は男性が単身で都市と農村を往復していたが，今日では出稼ぎ民の U ターン現象が多くみられる。その一方で，生活に困窮した人々が何らかの生活の糧を得ようと家族ぐるみで移動してくるため，都市では「出稼ぎ民都市化の進行」[松田　1995: 33] がおきている。セネガルの首都ダカールで都市化[1] が急激に進んでいる背景には女性や子供の都市への流入があり，妻子同伴の出稼ぎ形態が増えていることを示している。しかしこのような家族同居型の出稼ぎは，都市生活への憧れや農村とのきずなの断絶を意味するものではない。むしろそれは経済的な制約ゆえの消極的な理由からである [小倉　1995: 51]。また数ヶ国の統計データを分析したロコによれば，都市の家族は西欧社会の影

1) 都市化に関する調査（1987–89年）[Antoine et autres　1995] によると，過去30年のあいだにダカールの家族の規模はおよそ 2 倍になった。その原因のひとつが農村からの人口流入であると考えられている。ダカールには総人口の20%以上，出稼ぎ民の40%以上が集中している [République du Sénégal　1993: 30–33]。

響を受けて親と小人数の子供だけからなる核家族を理想モデルとして追い求める一方で，伝統的な家族の機能を都市生活に適応させている。結果的に都市の家族は，農村から来る出稼ぎ民やその妻子，または里子などを受け入れて，規模が大きくなっている [Locoh 1988: 441–478, 1991]。送り出し社会に関しては，フランスへの出稼ぎが多いアルジェリアの出稼ぎ民社会についての研究がある [Miyaji 1979: 105–130]。ここでは，出稼ぎによって生じた経済的な格差によって社会や家族における伝統的な社会関係が崩壊して，家族は分裂して小規模になる傾向であることが報告されている。このように，出稼ぎをとりこみ，それを支え，その影響を受けるうつわとして，家族は積極的にそれぞれがおかれた社会・経済的な環境に適応しようとしている。人々が主体的に生きようとするひとつのかたちが，家族の形態にあらわれるといえよう。

本稿でとりあげるソニンケ人は，出稼ぎ形態も出稼ぎによる送り出し社会への影響も，上記の例とはことごとくことなるが，やはり出稼ぎを中心として生計を立てている人々である。セネガル河上流域に住むソニンケ人は，1960年代からさかんにフランスへ出稼ぎに行った。出稼ぎは男性が出稼ぎと帰村をくりかえす還流型労働である。出稼ぎ民から故郷の家族への送金はいうまでもないが，注目されるのは，農村の社会・経済インフラストラクチャーが出稼ぎ民の共同出資によって整備されているという点である。これは自助努力による農村開発として，近年，セネガル政府の関心を引いている。その一例としてあげられるのが灌漑農業である。自然条件のきびしいセネガル河上流域では，天水農業にかわって灌漑農業に期待がかけられている。しかし灌漑農業はトラクターなどの大型農機具，あるいは水，肥料および農薬などの大型投資が必要であり，これらの農業投入財の確保[2] は出稼ぎ民からの送金なしには不可能である。出稼ぎはゆきづまった農村での生活に対する打開策としてはじまったが，今日では灌漑農業を中心とした生産基盤を支える不可欠な手段にもなっている [Lavigne-Delville 1991]。キミナルは，出稼ぎ民たちの価値観が文化も習慣もまったく異なる外国の地においても変わることなく，むしろ伝統的な価値観が再構築されたことを指摘して，それが出稼ぎ先のフランスで出稼ぎ民が形成する同郷者社会と出身村における家族および社会のいずれとも強い連帯を維持し，出稼ぎのシステムを支えていると論じた [Quiminal 1991]。

2) 構造調整プログラムの一環としておこなわれた公的部門の縮小措置において，農業部門でも政府から農民への援助が廃止され，公社の人員が削減された。1984年の「新農業政策」では政府は農村から後退し，生産から流通にいたるすべてを農民の自由意志に委ねることになった。政府は種子や肥料の配布あるいは貸付金の融資などをいっさいとりやめたので，これは事実上の放任政策ともいえる。結果として，農民にとって農業投入財をいかに準備するかが，不安定な気象条件に加えて営農をおこなううえでの先決問題になった。

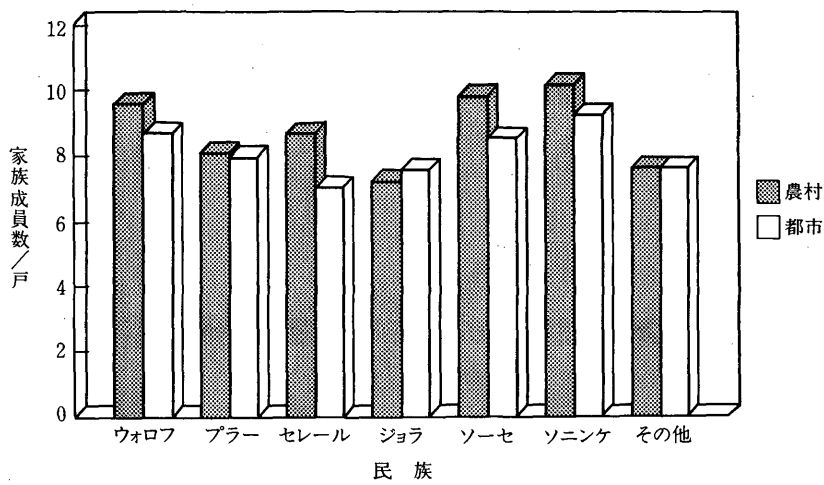


図1　セネガルの主要民族別による家族の規模
出所：Enquête sur les priorités 1993

私が調査をおこなったガンデ（Gandé）村もまたセネガル河上流域に位置する。住民の20%が不在で，そのほとんどはソニンケ人である。本稿はガンデ村での調査[3]にもとづいて，出稼ぎ民の送り出し社会における主体的な対応を，ソニンケ人の家族の特徴に焦点をあてて考察しようとするものである。ソニンケ人はセネガルの他の主要民族のなかでは，いちばん規模の大きい家族を形成する（図1参照）。ロコが都市の家族の規模について分析して出稼ぎ民との関係を明らかにしたように，出稼ぎ民を多くの割合で送り出しているソニンケ人家族は，出稼ぎによる何らかの特徴を帯びていると考えられる。本稿ではまずソニンケ社会と調査村の出稼ぎの実態について概観したうえで，ソニンケ人家族の特徴をつかみ，その形態について分類をおこなう。そしてどのような形態の家族が出稼ぎを支えているのか，また家族は出稼ぎをとおしてどのように社会や経済の変化に対応しようとしているのか考察することにしたい。

3）調査はパリ第V大学とセネガルのサン・ルイ大学との共同研究で，1993年3月から4月にかけて，セネガル河上流域の出稼ぎ民の多い5村を選定しておこなわれた。筆者はガンデ村に滞在して調査にあたった。調査内容はひとつは家族に関するもので家族構成，出稼ぎ，農業生産などの項目からなり，もうひとつは生殖と避妊に関する動向についてである。前者は調査村の全54戸の一家の主あるいはその代理を対象に，後者は無作為に抽出された男女それぞれ50人と75人に対して，質問票を用いた面接をおこなった。面接はフランス語で作成された質問票にもとづいて，ソニンケ語の通訳を介して，筆者とサン・ルイ大学の学生2人とで分担しておこなった。通訳者は地域で識字教育にたずさわるソニンケ語を母語とする男女2人で，あらかじめ面接の手法や質問の内容などについて研修を受けてもらった。

I　ソニンケ社会

I-1　移動の民

ソニンケと自称する人々はマンデ（Mandé）系民族に分類され，ウォロフ人からはサラホレ（Sarahkolé），バンバラ人からはマルカ（Marka）などとよばれ，古代ワガドゥ（Wagadu）王国の伝統を継承する。西アフリカに広く分布するが，今日の居住分布は13世紀ころに確立したと考えられている [POLLET et WINTER　1971: 19–34]。セネガルにおいては，かつてガジャガ（Gadiaga）帝国[4] が栄えたバケル（Bakel）からマリのカイ（Kaye）にいたる一帯をはじめ，セネガル河上流の左岸[5] に多く居住している。

ソニンケ人はサハラ砂漠を往来して岩塩と砂金の交易をおこなう「移動の民」[6] [POLLET et WINTER　1971: 32] であった。のちにヨーロッパ商人が奴隷貿易をはじめると，ソニンケ人は帝国の「旧捕虜」をヨーロッパ商人に供給して，18世紀を最盛期に商人として大いに活躍したといわれる。しかし奴隷の売買が廃止されると状況は大きく変わり，セネガル河上流域の地理的な条件はその後のソニンケ社会[7] に大きな影響を及ぼした。今日，セネガル人が一般に「辺境の地」と形容するように，セネガル最東端のこの地方は自然条件がきびしく，植民地時代以降，政治や経済，文化においてつねに周辺的位置にあった。仏領西アフリカの行政府が落花生生産[8] のために領土を組織的に統治する過程でも，ガジャガ地方一帯は開拓地に選ばれず，「移動の民」はナベタン（*Navétant*）とよばれる農業労働者として落花生栽培地帯に出稼ぎに行ったのである[9]。しかし，落花生を中心としたセネガルのモノカルチャー経済は60年代後半になると低迷の兆しをみせ[10]，落花生生産地における労働需要は減少しはじめたた

4）貴族バチリ（Bathily）家が支配した。詳しくはバチリの著作 [BATHILY　1972] を参照。周辺地域にはギジマカ（Gidimaka）やジャフヌ（Dyahunu）などの帝国が存在した。
5）バケル（Bakel）からウロソギ（Ourossogui）にいたるハゲ（Hage）とよばれる一帯とウロソギからダガナ（Dagana）にいたるフタ（Fuuta）とよばれる地域。
6）Delafosse による記述。
7）ここではセネガルのガジャガ地方のソニンケ社会をさす。
8）落花生は植民地政府の収入源としていちばん重要な産物であり，セネガルは仏領西アフリカのなかで最大の生産量をもっていた。西アフリカの植民地交易については Founou-Tchuigoua の著作 [1981] が詳しい。
9）落花生栽培の季節労働者については David [1980] を参照。
10）70年代には落花生の国際価格が暴落したうえに，サヘル地帯は干ばつに見舞われ，生産高が激減した。さらに過剰な落花生栽培が土壌の劣化をまねき農業全体の危機が顕在化した。

め，ソニンケ人はまたあらたな収入源をみつけなければならなかった。外国への出稼ぎはフランスの外国人労働者受け入れ政策のもとに60年代にすでにはじまり，70年代の国内の経済危機を反映してソニンケの人々にとって生計を立てるための必要不可欠な手段となったのである。

フランスへの出稼ぎはソニンケ社会に単に現金収入をもたらしただけでなく，自然や経済，社会，政治などの条件に恵まれない地域に住民をとどめ，彼らが生活してゆくための必要な生活環境をつくりあげる[11] ひとつの手段として確立した。

Ⅰ-2　身分制にもとづく社会

マンデ系の他の民族と同じように，ソニンケ社会はクラン[12] を基本的な構成単位とする社会を形成した。今日では社会や経済の変化にともなってクランの社会的役割は縮小したが，個人をクラン名で区別する習慣を重んじることにあらわれるように，ソニンケ人は自分のクランへの強い帰属意識をもっている。

ソニンケ人の社会生活は，生得的な身分にもとづく不平等な階層構造のうえに成立している。ホレ（*Hooré*）は語義のうえでは「自由民」を意味するが，それを構成するのは戦士とマラブ（イスラム教伝道師）のクランに属する貴族である。「職人」ニャカマラ（*Nyakhamala*）はグリオ（かたりべ）や革職人，鍛冶屋，宝飾職人などの人々で，ホレとともにソニンケ社会の構成員であることを認められているが，かつてはそれぞれ特定の貴族のリネージに帰属して，労働奉仕とひきかえに一定の生活を保証されていた。このふたつの階層の下に「旧捕虜」のコメ（*Komé*）がある。コメは民族間の戦争において略奪された捕虜の子孫や，もともとはホレやニャカマラであったにもかかわらず，何らかの理由で身分を変えざるを得なかった人々で，かつては支配者層やその家族に対して一定の役務を義務づけられていた。ただしなかには支配者の片腕となって政治的な特権を行使する場合もあった[13]。

かつてはこの3階層のあいだには，社会，経済，政治的な序列を規定する諸制度が厳格に作用していた。村の創設者や貴族である村の長老たちは，慣習法にもとづいて

11）セネガル河流域では出稼ぎ民の送金によって，各村落に診療所や学校やイスラム教寺院が建てられたり，灌漑施設が整えられた。セネガルの他の地域において，これほどインフラストラクチャーが整備されている村はなく，この地方が都市から離れた辺境に位置しているだけにいっそう目をみはらせるものがある。

12）父系の出自集団として認識される。

13）ラヴィニュ・デルヴィルは，コメが政治的権力の枠に入ることができないと記述しているが [LAVIGNE-DELVILLE 1991: 29]，コメは必ずしも何の権利ももたない社会の最底辺にいる存在ではない。実際に調査村では，村長の補佐役は代々コメによって受け継がれていることが確認された。

土地を分配する権利[14]をもち，耕作権の取得は身分によって決められていた。しかしながら，土地を介した社会関係は農業生産システムの変容にともなって変わりつつある。気象条件の悪化にともなって伝統的な天水農業は停滞し，耕作権をめぐる権力構造は事実上，形骸化した。また灌漑農業の導入は灌漑地区における耕作権を各農家に平等に与え，農業協同組合のもとに共同で水の管理と農業経営をおこなうという新しい農業生産システムをつくりだした。それによって従来の土地所有形態を排除し，平等な労働の概念をもちこんだ。これらの条件に加えて，今日，身分の境界が経済面においてあいまいになってきた背景には，人々の生活をとりまく社会・経済的な環境が変化し，身分にかかわらず人々は経済的な困難を経験したためだと考えられる。「職人」や「旧捕虜」は，「自由民」に対して従来のように労役の奉仕をおこなわず，それぞれが独立して生業を営むようになった[15]。そして「自由民」も他の身分と同じように，収入を求めて自ら出稼ぎに行かなければならなくなったのである。

調査村でも新しく移住してきたばかりの者をのぞいてカ（*Ka*）とよばれるすべての家族[16]が田畑を所有しており，いわゆる労役はおこなわれてないことが確認された。しかし経済面での身分の差異があいまいになっても，身分制は依然として職業区分や婚姻関係，あるいは政治的な発言権の有無など，社会・政治構造の基盤となっている。このような社会条件のちがいが，家族が生計を立てるうえでどのように影響しているのか，のちに検討することにする。

Ⅰ-3　カギュンの役割

カとよばれる家族はソニンケ社会における生産と消費，および居住の単位であり，カギュン（*Kagumme*）はその最高責任者である。通常はカにおける最年長者の男性がカギュンになるが，調査村では女性のカギュンも2人存在する。これは例外的な事例であると同時に一時的な状況だと思われる。2人とも寡婦であり，1人はカギュンであった夫が亡くなったあと家庭内の不和によってカが分裂したためべつのカを形成した。もう1人は扶養家族が全員20歳以下の独身で，カギュンになるべきものがいな

14）1965年に国土法が定められ，土地の分配権は村落議員に委ねられることになった。この法律によって小作制度は基本的に廃止され，耕作をしようとする者はだれでも平等に土地の耕作権を得ることができるようになった。しかし実際には，村落議員には慣習的に権力を握っていた村の長老がなり，結局は社会的な権力はつねに一部の少数の人々の手にあった。そのうえ，ソニンケ人が集中しているタンバクンダ（Tanbacouda）州において村落議会が構成されたのは，国土法が設定された20年後の1985年だった［Lavigne-Delville 1991: 97–98; Block 1991: 239–247］。

15）Adams, Lavigne-Delville, Block, Quiminal，など複数の研究者から指摘されている。

16）家族の概念については，Ⅳ章を参照。

い状況にある。2人の女性は，いちばん近しい関係にある男性の親族を相談役としてあげている。ソニンケ社会において女性は実質的な決定権をもたず，女性カギュンの地位は名目上のものである。アフリカやセネガルの他の民族では，「家長[17]」の地位そのものが形式的なものになりつつあるといわれている[18]。しかしソニンケ社会では，カギュンは依然として家族成員に対して絶対的な権力をもつ存在である。カギュンはカの代表として村社会における政治的な役割をにない，家族成員に対して社会・経済上の責任を負う。家族内の争いを調停し，子供の就学，結婚，出稼ぎなど，家庭内のすべてのことがらに関して決定権を行使する。経済面では年間の耕作計画を立て，収穫物の管理をおこない，あるいは出稼ぎ民からの送金をうけて金銭や家族の財産すべての管理にあたる。

農村内部の階層構造が農業生産システムの変容にともなって一部でくずれているのに対し，カにおけるカギュンの地位は反対に強化されていることが，ラヴィニュ・デルヴィルやキミナルによって指摘されている。かつてカには，カギュンの権限のもとに家族成員みなが作業する共同田畑の他に，成人男性や既婚女性に配分された個人田畑があった。そこで収穫した農産物は彼らが自由にすることができた。しかし砂漠化の進行や気象条件の悪化などによって伝統的な農業が停滞し，出稼ぎに主要な労働力を吸収されると，個人田畑は放置され，カギュン所有の共同田畑で家族の食糧を耕作することが最優先になった。ガンデ村の例でも個人的に農業をおこなっているものはほとんどなく，きわめて少数の女性（すべてカギュンの妻）が個人田畑を耕作しているのみであった。このように農村に残された家族全員が共同田畑での農作業を優先せざるを得なくなると，カギュンは伝統的な地位の基盤，すなわち土地と労働を管理するものとして，再びその地位を強化した。

また，出稼ぎ民からの送金は農村に残された家族の生活を潤し，それによってカギュンは，かつての農産物を管理するという立場から，今度はあらたに金銭を一括して管理する最高責任者としてその権限を強化したのだった [Lavigne-Delville 1991: 26–27]。ガンデ村での調査でも，出稼ぎ民の97%[19] が，送金は農村に残っている自

17）一家の主を意味する用語として便宜上用いたが，日本の家長制度を意味するものではない。本稿では家族を世帯とはことなった単位としてあつかうので（後述），混乱をさけるために世帯の主という用語は使用しなかった。以下これに同じ。

18）Locoh [1991: 121]。ジョップもセネガルのウォロフ族について同様の指摘をしている。ジョップの調査によれば，ウォロフ社会では家族が分裂して規模が縮小している [Diop 1988]。

19）ただし有効回答者72人が対象である。有効回答率は65%から79%であるが，この差は，出稼ぎ民すべてが仕事に従事して送金できる状況にはないこと，かつ出稼ぎ民が村にいないので直接に確認できなかったために，その他の質問事項も参照して推定したことによるものである。

分の妻子に対してではなく，カギュンに対しておこなっているという結果を得た。一方，カギュン自身の出稼ぎ経験もその地位と役割の強化につながっている。カギュンは農村から自分の家族の若者を出稼ぎ先によびつける。新参者は，カギュン自身が若い頃そうであったように，年長者の援助なしには外国へ行くことも，その土地で生活することもできない。このように，カの内部におけるきずなは切れることなく出稼ぎ先までつながっている。出稼ぎをとおして経済生活が変化して，それぞれのカのあいだに経済力の差が生じても，社会内部の伝統的な身分関係や規範は変わることはなかった [QUIMINAL　1991: 111]。

カギュンの権限が強化されたことによって，家族の形態にも何らかの影響が及んでいると思われる。別の見方をすれば，カギュンの社会・経済的な特徴は家族の形態を左右する大きな要因である。

Ⅱ　ガンデ村の概観

Ⅱ-1　その成り立ち

私が調査した地であるガンデ村は，首都ダカールからおよそ800キロメートル離れたセネガルの東の果て，モーリタニアと国境を接するセネガル河沿いに位置する。1989年にセネガル・モーリタニア紛争が勃発したジャワラ（Diawara）郡に属している。県庁所在地バケル（Bakel）からは北に32キロメートルのところにあり，乗り合いタクシーが朝晩往復しているので人とものの往来は頻繁である。

ガンデ村は，領土拡大をめざしたチュアブ（Tuabou）村（バケルから5キロメートル）のソニンケ人の貴族バチリ（Bathily）に導かれて，100年ほどまえにひらかれた村である。最初の住民には北5キロメートルにあるデンバカーネ（Denbacané）村のオラ・トゥレ（Hola TOURE）と，15キロメートル南に位置するムデリ（Moudery）村のサンバ・ンジャイ（Samba NDIAYE）が指名された[20]。その後まもなく，マリ出身のマラブ（Marabou＝イスラム教伝道師）であるサンバ・ドラメ（Samba DRAME）一家がバチリの許可を得てこの村に住み着いた。

この3家族の子孫が政治，社会，宗教的権力の中心的位置を占めている。トゥレ一家は代々村長を受け継ぎ，ンジャイ一家は村長の補佐役として村の政治に参加し，ドラメ一家はマラブとして宗教的な役割を守り続けている。これら古参の3家族は今日

20）ガンデ村とこれら2村では今日も頻繁に婚姻関係がむすばれる。

までに3世代が交代した。その他のソニンケ人の移住も村の創設初期に多く，つづいてセネガルの内陸からアルプラー人（Haalpulaar），マリからはバンバラ人（Bambara）が移り住んだ。このような民族ごとにことなる移住時期は，当然，家族の発展周期に影響すると思われる。

Ⅱ-2　経済・社会状況

セネガル河上流域では地質的にことなった土壌を利用して，2種類の農業を伝統的におこなっていた。ひとつはジェリ（*Dieri*）とよばれる砂丘・準平原地帯でおこなわれるトウジンビエ（*Ille*）を中心にした天水農業である。もうひとつは河の氾濫を利用したトウモロコシ（*maka*）栽培である。これは河岸の土手に広がるファロ（*Falo*）と，コランガ（*Kolanga*）といわれる粘土層のくぼ地でおこなわれる。しかし降水量の少ないこの地方では，もともとジェリにおける耕作は充分な収穫をもたらすことができなかった。そのうえ1989年にモーリタニアとの紛争が起きてから，ファロとコランガが広がるセネガル河右岸のモーリタニア領土での耕作が困難になった。人々はますます伝統的な農業だけに頼っては生活できない状況にある。1970年代後半にセネガル河流域開発整備公社（Société d'Aménagement et d'Exploitation du Delta du Fleuve Sénégal）によって設置された灌漑施設は，小規模ながら天水農業に代わって穀物をはじめトマトやオクラ，なす，さつまいもなどの野菜の栽培を可能にしている。

人々は牧畜も営んでいるが，家畜の保有数は家族によって大きくことなる。羊がいちばん一般的で，54戸中44戸の家族において平均8.6頭を所有している。山羊を所有している家族は34戸あり，一家族あたり平均7.6頭である。なかには60頭を所有する家族もある。牛を所有している家族は19戸だけで平均3.4頭と少ない。これら家畜は流通の対象ではなく，むしろ財産として保有しており，儀礼や祭事の際に消費することが多い。

村では毎日，女性数人が小さい売り場をかまえ，野菜やセネガル河で漁った魚を売っている。その他の農産物や日用必需品は，村の3軒の雑貨屋で入手することができる。商品の価格はダカールや地方都市よりも高く，ものによっては5割高で流通している。現金収入源はほとんどすべてが出稼ぎ民からの送金であり，これによって人々の購買力が支えられている。

セネガル河上流域の他の地域と同じように，ガンデ村においても出稼ぎ民からの送金が社会・経済インフラストラクチャーの整備に大きく貢献しており，都市から遠い

小さな村であるにもかかわらず，セネガルの他の地方に比べるとはるかに施設が整っている。出稼ぎ民たちは，まず最初に立派なイスラム教寺院の建立に出資した。76年には住民の発意で診療所と医薬品倉庫が建設され，82年には小学校の2教室が増設された。その他にミレットの製粉機が1台と，井戸が12井ある。これらはフランスのパリにあるガンデ村の同郷人会が，村の住民と協力して実現したものである。

今日，出稼ぎを介して農村の経済基盤は大きく変化した。現金収入の有無が，毎日の生活物資の購入のみならず，潅漑というあたらしい農業経営を左右する要因として，人々の生活のあり方に関わるようになったのである。

Ⅲ　出　稼　ぎ

Ⅲ-1　村の人口構成と人々の移動

ガンデ村の総人口は，1993年4月の調査時に54戸，1006人であった。ガンデ村では故郷の村に残った家族と出稼ぎ民は，精神的にも，家族の社会・経済的な運営においても密接なつながりのもとに生計を営んでいる。それゆえ，ことなった場所に住まいを構えていても，人々が家族の一員としてみなすかぎり，これらは家族成員として住民に含めた。そして後に述べるように，分散しながらも強いきずなで結びついている家族こそが，ソニンケ人の「家族」なのである。出稼ぎ民は故郷の村に妻子を残して単身で出かけるのがつねであるため，村に残っている男女の比率は0.83になる。人口構成（図2[21]参照）は若年層が多いピラミッド型で，15歳未満の人口は全体の45.6%を占め，60歳以上は7.6%にすぎない。

全住民（1006人）の19.3%にあたる194人は，仕事やその他の理由で村にいない他出人口である[22]。そのうちの90%以上がソニンケ人である。他出中の人々の75.9%が

21）グラフでは年齢が確認できた，あるいは推定可能な974人（総人口の96.8%）が対象になっている。推定年齢は女性の場合にのみ適応した。推定方法は男女別の個人調査から得られた女性の平均初婚年齢をもとにしている。結婚年齢は平均15歳で，その年齢の女性はほとんど思春期をむかえており，結婚当初は避妊をまったくおこなわないことを考慮すると，多くの場合，第一子の出産は結婚1年後の16歳のときだと考えることが妥当である。年齢が不明の者は中高年に多いが，女性は自分の年齢を知らなくても子供の年齢は把握しているので，第一子の年齢に16歳を加算することで女性の現在年齢を推定することができる。

22）人々の移動をより正確に把握するために，質問票では以下の居住形態を区別した。194人は（2），（5），（7）に区分される人々である。
（1）在住者（つねに村で生活している者）
（2）都市生活者（仕事や勉学などの理由で生活の主体が街にあるが，定期的に帰村する者）
（3）訪問者（生活は他の場所にあるが，たまたま調査時に村にいた者）

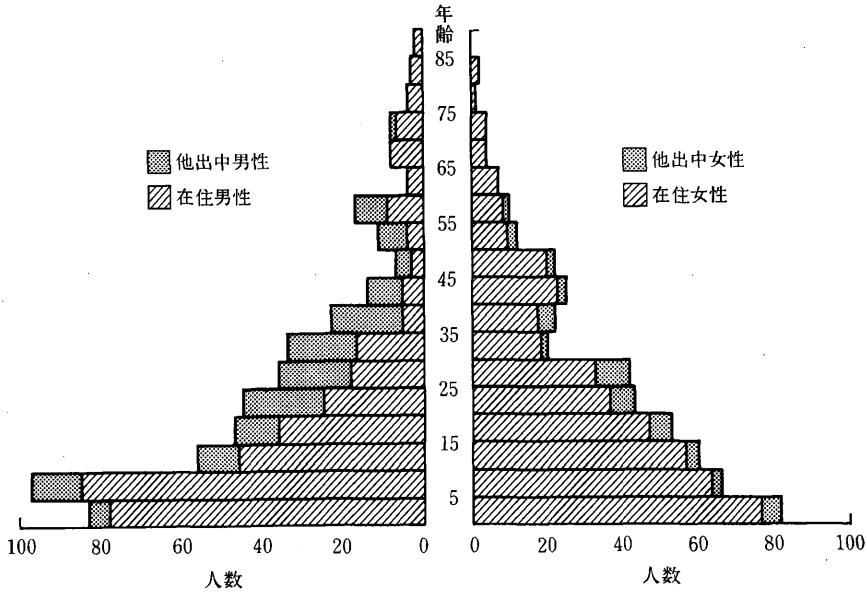


図2　年齢／男女／居住状況別によるガンデ村の人口ピラミッド（総数＝974人）

男性であり，年齢別では15歳以上の男性の43.0%が不在である。この割合は35歳から40歳の男性になると78.3%にのぼり，農村では農作業に必要な労働力の大半が欠けていることを示している。人々の移動は必ずしも出稼ぎを意味するものではない。経済

↘ (4) 帰村中の出稼ぎ民
(5) 他出者（6カ月以上前から村を離れている者）
(6) 離村者（他出者だが便りもなく消息もわからなくなった者，あるいは意志を表明して他の場所に生活を移した者）
(7) その他（一時的な他出者であるが，都市生活者にも出稼ぎ民にもあてはまらない者。例：放牧にでている者）

この分類による居住状況の判断は実際には難しいものがあった。とくに「他出者」に関してはつねにその背景を尋ねるようにして，正確な情報をつかむよう努力した。たとえば，たとえ6カ月以上前から村を離れていても，定期的に村にもどってくる場合は「都市生活者」に分類した。というのは，たいていの「都市生活者」は首都ダカールで生活しており，800キロメートルも離れたガンデ村に頻繁に帰ってくるのは困難だが，実際には送金や定期的な帰村といった「都市生活者」の性格をもっているからである。このような判断によって，「他出者」に含まれる外国への出稼ぎ民と国内の「都市生活者」とを明確に区別することができた。

(6) に分類される「離村者」にあてはまるのは，たった5人，一家族の例だけだった。この一家は，家長がその地位を退き，次代の家長に残りの家族をたくし，自分は妻と子供をともなってダカールへ住まいを移したのである。これに相似する例は，家族をともなって出稼ぎにいった家族（ごく小数）であるが，この場合は「離村者」とはみなさなかった。というのは，出稼ぎ民はつねに村に残った家族とのつながりを保っているからである。外国で生まれ，一度も村を訪れたことのない子供たちのことでさえも，村の家族はよく知っている。出稼ぎ民からは必ず送金があり，男性は定期的に村にもどってくる。妻子が帰ってこないのは，離村したためではなく経済的な制約に因るものである。

活動に従事しているいわゆる出稼ぎ民に相当するのは194人中103人である。出稼ぎに行ったとしても，出稼ぎの初期ではすぐに仕事に就くことができるとはかぎらない。その他に，街の学校へ通う子供もいる。女性の場合，移動は出稼ぎとはあまり関係がなく，都市に住む親戚や縁者を訪ねる目的であることが多い。

人々の他出先（表1参照）はフランスが全他出者中の63.2%，つぎに多いのがダカールで23.7%である。男女別にそれぞれの移動状況を比較してみると，男性では1993年4月以前の他出経験者に比べて，調査時点の他出者が2倍である。同時にフランスへの割合が増えている（47.9%から64.3%）。ダカールは一般的にはそれ自体が出稼ぎ先であるが，ソニンケ人にとってはむしろ出稼ぎの最終目的地であるフランスへ行くための中継地である。ダカールよりもフランスへの他出が増えたことは，男性の移動が経済活動を目的とした出稼ぎとしてより確立してきたこと，そして出稼ぎが人々の生活手段としてより重要な位置を占めていることを示している。

一方，女性では他出者そのものが少ないうえ，調査時点での他出者は過去の他出経験者より20%程度少ない。行き先は他出経験者では圧倒的にダカールが多かった（77.8%）のに対し，他出中の人ではフランスが中心になっている（62%）。ダカールよりフランスへの他出が多くなっているのは，女性の移動がたんなる親戚への訪問や気晴らしの旅行ではなく，出稼ぎ民である夫に同伴する目的でおこなわれていることを示唆するものである。しかしながら，女性の他出が少ないのは，婚家において女性は勝手な行動が許されず，自由に旅行などをすることができないためである。そこには外国に出稼ぎに行った男性たちを村につなぎとめておこうとするカの意図がはたらいており，妻子はいわばカギュンによる人質のようなものである。実際のところ，他出中の人々のなかで妻あるいは妻子を同伴しているものは全他出者の15%にすぎない（表2参照）。したがって，出稼ぎは妻子を伴った定住型と

表1　行き先／男女別による他出者数と他出経験者数

	男性（人）	女性（人）
他出者数（1993年4月）		
ダカール	33	13
国内地方都市	7	2
西アフリカ	9	4
アフリカ	5	0
フランス	99	31
ヨーロッパ	1	0
合計	154	50
他出経験者数（1993年4月以前）		
ダカール	22	49
国内地方都市	3	2
西アフリカ	7	2
アフリカ	4	1
フランス	35	9
ヨーロッパ	2	0
合計	73	63

いうよりは，男性が単身で故郷と出稼ぎ先を往復する還流型という性格が強い。

出稼ぎが還流型であるのは，セネガル人にとってフランスの入国ビザの取得が容易でないことも関係している。しかし，いったん職を得てフランスに住み着いてしまうと，就業者にとっては，妻子同伴の方が扶養者手当を得るという点で有利になる。出稼ぎ民のなかには，扶養者手当を目的にして妻子を同伴しているものもいる。フランスでは社会保障費の収支が赤字であり，子沢山のアフリカ出身の就業者は拠出金以上に手当を受けていると批判の対象になっているほどである。出稼ぎ形態は，受け入れ国の移民政策や雇用条件の変化，および送り出し社会の経済基盤と密接に関連している。さらに，送り出し社会と出稼ぎ民の関係が，伝統的な慣習や規範によって強く結びついているかどうかに左右されるものであり，調査結果もこのような関連において理解する必要がある。

表2　同伴者の有無と出稼ぎ民数
（総数＝194人）

	人数
なし	92
配偶者	5
子供	4
配偶者と子供	22
その他の家族	57
不明	14
合計	194

Ⅲ-2　経済活動としての出稼ぎ

まず，ガンデ村の男性の出稼ぎのかたちを，一家の最年長者で出稼ぎを経験したのち帰村したカギュン[23]の平均的なライフヒストリーからえがいてみよう。現在，家長である人のうち，出稼ぎ経験者はソニンケ人では84.2%，アルプラー人では18.2%である。出稼ぎ経験者のうち72.2%がフランスで働いた経験をもっている。清掃夫や工事現場の作業員といった低賃金労働に就くのが一般的である。若い頃から出稼ぎにゆき，2，3年ごとに帰村しながら14年のちに引退するというのが平均的な出稼ぎのかたちである。

ソニンケ人男性のライフパターンにほとんど組み込まれたかのような出稼ぎは，村人の生活にかなりの影響を与えている。故郷の家族への送金は，出稼ぎ民の60%以上が定期的，あるいはときどきおこなっている。一度も送金したことがないものも20%程度いるが，自分自身の生活が安定していなかったり，あるいは経済的な余裕がなかったりするためで，外国の地であたらしい生活を築こうとしているからではない[24]。

23）ただし出稼ぎ中の家長が1人だけいる。

24）キミナルの著作から，初めての給料を手にした出稼ぎ民の供述を引用しよう。
「――（給料をもらって）何をしたの？　何か欲しいものでも買ったかい。（調査員の質問）――いいや何も買ってないよ。クリシィに行って，伯父に預けたんだ。伯父は何かした↗

出稼ぎ民からの送金によって生計を立てているセネガル河上流域のその他の村々と同様に，ガンデ村の家々のなかには，自然条件のきびしい荒涼した土地にはちぐはぐに映るほど立派な造りのものがある。コンクリート造りでペンキを塗った建物などを，セネガルの他の地域の農村ではほとんど目にすることはない。ガンデ村では60％の家族において，コンクリートやコンクリートと泥をまぜた改良泥，あるいはトタン屋根などといった近代的な建築材料を使用した建物を，少なくとも1棟は所有している。そして地下浸透式の便所は96％以上の家族に普及しており，それは簡単な穴にすぎないが周りをコンクリートでかためた清潔なものである。またトランジスターラジオは90％近く普及している。その他に農村ではめずらしいタンスを所持する家族（24％）や，高価な牛を所有する家族（35％）では，出稼ぎ民の数が多く，出稼ぎによる経済力の向上を示している。

このように出稼ぎは農村の生活の全体的な向上に貢献しているが，問題がないわけではない。ある男性によると，送金はすればしただけ衣食住に消えてゆき，出稼ぎは永遠にやめることができないという。農村の家族が出稼ぎ民の送金に依存して，自分たちから何かを生産する意欲がないことを，この男性は非難していた。たしかに農村の家族は農業生産をおこなうかわりに，出稼ぎ民から送られてきた現金で食糧や日用必需品を購入することができる。なかにはまったく農業生産をおこなっていない家族もある。一家族あたりの年間平均穀物生産高は 1830 Kg[25] であり，調査時には38戸の家族が平均 1500 Kg の穀物を保管していた。調査時の3月は収穫時期から数ヶ月すぎていたにもかかわらず，貯蔵量が豊富であり，かつ貯蔵食糧の種類が多いことは特筆すべきことがらである。首都からも地方都市からも離れたガンデ村では，あらゆる商品の価格が高いにもかかわらず人々は食糧を購入し保存しているが，セネガルの農村では日々の糧は毎日その日の分だけ購入するのが一般的な習慣である。人々が購入する食物は米がいちばん多く，調査年に稲作をおこなった家族は6戸にすぎないのに16戸の家族が米を貯蔵していた。その他，落花生油や砂糖なども保存されている。出稼ぎ民からの送金が，村人の購買力を支えているといえよう。

↘ いことはあるかと聞いたけれど，僕はそれは伯父が決めることだと言ったんだ。そうしたら伯父はどういうふうにお金が使われるのか説明してくれた。僕はそれを誇りに思ったよ。僕が稼いだお金が村の家族のためになるのはわかっていたんだ。1972年はきびしい干ばつだったんだ。お金がどんどん村に送金されたら，村は将来どんなふうになるだろうかと僕は想像したよ」[Quiminal　1991: 121]。この若い出稼ぎ民の答えからふたつのことが説明される。まず年長者と年少者の関係が村から出稼ぎ先へ，そしてまた村へとつながっていること，そして金銭が家族の共有財産として認識されていることである。

25）100 Kg の袋が18.3ヶという非常に大まかな推定である。回答があったのは54戸中42戸。

しかし，村人は出稼ぎ民からの送金だけに頼って生活しているわけではない。耕作状況のちがいをみてみよう。まず出稼ぎ民の数が身分によって大きなひらきがあることを指摘する必要がある。「自由民」では一家族あたりの出稼ぎ民の数は全家族の平均より少ないが，「職人」と「旧捕虜」の身分では出稼ぎ民の数が平均を上回る。かつては「自由民」に労働を提供することで生活の保障を得ていた「職人」と「旧捕虜」の身分は，伝統的な農業が停滞して農村における生産基盤が不安定になりその相互依存関係が消滅すると，経済的な打撃をより直接に被ったにちがいない。そして，いち早く出稼ぎにゆく必要に迫られたと思われる。つぎに耕作状況をみると，肥沃な土壌のファロと灌漑地で耕作する割合は「職人」と「旧捕虜」の身分で高い（表3参照)。さらに親族以外の農業労働者の使用状況では，「職人」と「旧捕虜」の身分で農業労働者を雇っている割合が大きい（表4参照)。つまり出稼ぎだけに収入源を求めるのではなく，農村の生活基盤である農業にも力を注ぐことを考え，家族内の労働力を補うために，出稼ぎ民からの送金を使って農業労働者を雇いながら農業経営をおこなっている。

結局，出稼ぎは農村の生産基盤を代替するものではなく，それを補強するものとして機能していると理解すべきであろう。このような身分による出稼ぎへの対応のちがいはどのように家族の形態に影響しているのか，次章での家族の分析において重要な要因として注意しておきたい。

表3　身分／土壌別による耕作状況（戸）（複数回答）

	ジェリ	ファロ	灌漑地	コラッド
自由民	35	23	23	17
職人	5	4	4	2
旧捕虜	11	10	9	3
合計	51	37	36	22

表4　身分別による農業労働者の使用状況（総数＝53戸）

	いいえ	はい／無報酬	はい／報酬有	合計
自由民	24	2	11	37
職人	1	2	2	5
旧捕虜	4	1	6	11
合計	29	5	19	53

Ⅳ　家族の分析

これまでソニンケ社会と出稼ぎの特徴について述べてきたなかから，家族の形態に関係すると思われる重要な点がふたつ見いだされた。ひとつは出稼ぎをとおしてカギュンが家族成員に対する影響力を増強してきたという点。もうひとつは身分によって出稼ぎへの対応がことなるという点である。本章では，この二点について検証しながら，家族の規模と形態から家族の類型区分を試みる。それによって出稼ぎがどのようなタイプの家族に支えられているのか明らかにしたい。

Ⅳ-1　用語の定義

すでに家族という言葉を使ってきたが，サハラ以南のアフリカ諸社会の家族を分析するにあたって，3種類の用語を区別する必要がある。「家族」と「世帯」そして「家族核」である。いちばん一般的に使われるのは，西欧社会の家族をモデルに定義した「世帯（ménage)」である。「世帯」はただひとりの「世帯主」の権限のもとに生計をともにする血縁や婚姻関係で結ばれた人々の集合体であり，生産と消費の最少単位として認識される [Gendreau et Lacombe　1977]。しかしこの概念だけではサハラ以南アフリカの家族の形態を明らかにすることができない。ロコはさらに「家族（concession)」と「家族核（noyau familial)」を区別している [Locoh　1988: 444]。「家族」は一ヶ所の屋敷地に所属して，ただひとりの「家長」のもとに生計をともにする単数あるいは複数の「世帯」の集合体である。たとえば，兄と弟がそれぞれ独立した生計の主体となりながら，同一の屋敷地で生活している例がこれにあたる。この場合，「家長」はつねに最年長者である。ガンデ村の場合，出稼ぎ民をかかえている「家族」は家族成員が分散して生活しているため，本調査では一ヶ所の屋敷地に居住することは「家族」の条件とはみなさず，帰属意識と経済上のつながりをもちながら，ひとつの屋敷地を中心に生計を営んでいる人々の集まりを「家族」として考える。そして「家族核」は，家族構成をより正確に把握するための分析上の単位であり[26]，生物学上の親子（子は未婚でかつ子供をもたない）を中心とするひとつのグループである。すで

26）もっとも単純な構成は，一組の夫婦とその子供である。場合によって，里子や夫＝父の母が加わることがある。その場合，夫＝父の母はすでに寡婦となり，同時に自分の子供たちはみな結婚してしまい1人っきりの身である。このような個人は親族的にいちばん近い「家族核」に所属する。他方，出戻りの娘，あるいは未婚の母とその子供という単位も1つの「家族核」を形成する。

に述べたように今日のソニンケ社会では，「家長」がただひとりの，かつ絶対的な権力保持者なので，「家族核」を形成する父あるいは母は，必ずしも家長や世帯主のような社会・経済上の役割をもっていない。しかし，「家族核」はとくに既婚男性がその中心になっている場合には，生計の単位として独立する可能性もある。その点で，一夫多妻の男性を中心に形成されている母と子からなる親子の単位とはことなる。

ソニンケ社会では「家族」をカ（*ka*），「世帯」をコレ（*kore*）と区別し，アルプラー社会ではそれぞれをガレ（*galle*），フォワイレ（*foyre*）とよんでいる。各々の社会において，両者の区別は明確である。ガンデ村では複数の「世帯」からなる「家族」は1戸[27] しかなかったので，それを含めたすべてを「家族」と総称して，「家族」と「家族核」の関係から分析を進めることにする。

Ⅳ-2 「家族」の規模

まずはじめに，分析の対象となる「家族」について，ガンデ村の「家族」の特徴を概観しておきたい。ガンデ村における「家族」の平均規模は18.6人，セネガルにおける国内平均（8.7人：1992-93年）[28] の2倍以上である。ただし半分以上の「家族」は15人以下の構成であり，最少は2人から最大は102人に及ぶさまざまな「家族」が存在する（図3参照）。

ソニンケ人は全国的にも規模の大きい「家族」を形成している民族である。しかし，

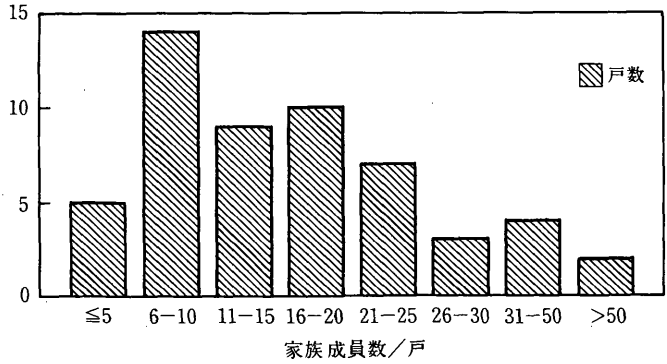


図3　家族の規模（総数＝54戸）

27）「家長」の死が原因で「家族」が3つの「世帯」に分裂した例。1つは家長を継いだ故人の弟の「世帯」，もう1つは故人の妻とその未婚の子供たちからなる「世帯」，3つ目は故人の息子とその妻子からなる「世帯」である。

28）République du Sénégal [1993: 47-51]。

ガンデ村のソニンケ人の「家族」はそれをはるかに上回る，22.4人／戸という規模をもっている。一方，アルプラー人やバンバラ人では民族別の全国平均と大差はない。ガンデ村の場合，すでに述べたように，それぞれの民族は時期を隔てて移住してきたという背景がある。比較的あとから移住してきたソニンケ人以外の民族で「家族」の規模が小さいのは，物理的にも社会的にも家族が発展するための時間が経過していないことが関係していると思われる。しかしながら他方で，これらのちがいは，それぞれの民族に固有な何らかの特徴によるものだと考えることができる。というのは，いかなる時期の「家族」をみても，ソニンケ人以外の民族ではそれぞれの全国平均より大きい規模をもった「家族」はいないからである。

「家族」の規模は家長の身分によっても大きくことなる。「職人」と「旧捕虜」ではそれぞれ29.2人と20.8人であり，「自由民」では全体平均より小さい規模である。

このような規模のちがいには，出稼ぎ民の数と密接な関係があると考えられる（表5，表6参照）。「家族」は出稼ぎ民をかかえることで，より多くの人間を確実に養うことができる。またその逆に，より多くの人間が生活するためには，より確実な収入源を確保する必要がある。ソニンケ人では「家族」1戸あたりの出稼ぎ民は11.4%（2.6人）に相当する。他出中で経済活動に従事していないものも9.2%（2.1人）を占める。一方，アルプラー社会では平均9人の「家族」に出稼ぎ民は3.3%（0.3人）しかみられないうえ，他出中で無職のものはさらに少ない。ソニンケ人にとって出稼

表5　民族別による1戸あたりの出稼ぎ民数と職なし他出者数の割合および家族規模（総数＝1006人）

	出稼ぎ中	職なし他出者	人／戸
アルプラー	3.0%	2.0%	9.0
ソニンケ	11.4%*	9.2%	22.4
その他	11.8%	8.8%	8.5

*ただし帰村中の出稼ぎ民を含まない。

表6　身分別による1戸あたりの出稼ぎ民数と職なし他出者数の割合および家族規模（総数＝1006人）

	出稼ぎ中	職なし他出者	人／戸
自由民	9.5%*	7.9%	16.8
職人	12.3%	4.8%	29.2
旧捕虜	11.4%	12.7%	20.8

*ただし帰村中の出稼ぎ民を含まない。

ぎは家族と社会の存続を支える重要な手段である。それは親から子の世代へと引き継がれ，同郷者の会によって組織的に管理されている。人々の移動は頻繁で，農村の生活はつねに外とのつながりのうえに成り立っている。それに対し，アルプラー人は農村に生活の主体があって，それを維持しようという姿勢がみえる。出稼ぎはおこなわれていても組織的ではなく，個人単位であることが多い [LAVIGNE-DELVILLE 1991: 88-100]。身分別では，「家族」規模の大きい「職人」と「旧捕虜」において出稼ぎ民の数が多い。ここには民族別にみられたような生活戦略のちがいはないものの，出稼ぎとの相互作用において「家族」の規模が大きくなっていることが読みとれる。

このように，出稼ぎの影響は「家族」の規模にあらわれているとともに，すでに述べたように家長の権限の強化にもつながっている。「家族」の類型では，家長の年齢や就任年齢および婚姻状況にも注目しながら，さらに詳しく出稼ぎとの関係について考察することにする。

Ⅳ-3 「家族」の類型

Ⅳ-3-a 類型の定義

ロコ [LOCOH] が「家族核」をもとに区別している3つの「家族」の形態[29] を参考に，さらに家族成員の直系親族と傍系親族の区別，およびそれぞれの「家族核」の存在によって，ガンデ村の「家族」を次のような類型にしたがって分類した（図4参照）。

（1）直系単核家族　：夫婦または片親＋未婚の卑属（単身の出戻り娘を含む）＋［その尊属（多くは夫の母）＋里子など］

（2）直系・傍系単核家族　：直系単核家族＋未婚の傍系親族

（3）直系複核家族　：直系単核家族＋直系子孫の家族核

（4）傍系複核家族　：直系単核家族＋傍系親族の家族核

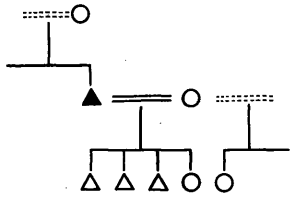
（5）直系・傍系複核家族　：直系複核家族＋傍系複核家族

注）ただし［　］は絶対不可欠なものではない。（2）～（5）についても同様。

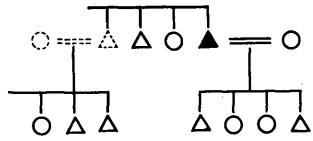
Ⅳ-3-b 類型別にみた「家族」

ガンデ村の「家族」は3分の2が複数の「家族核」から構成されている（図5参照）。

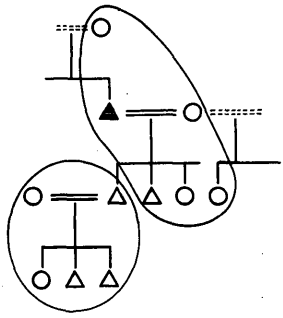
29）(1) 夫婦とその子供という生物学的な親子からなる家族
(2) 片親とその子供
(3) 夫婦あるいは片親とその子供，およびその他の親族を含んだ拡大家族 [LOCOH 1988]。



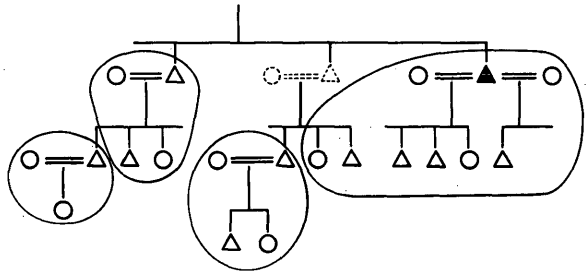
直系単核家族



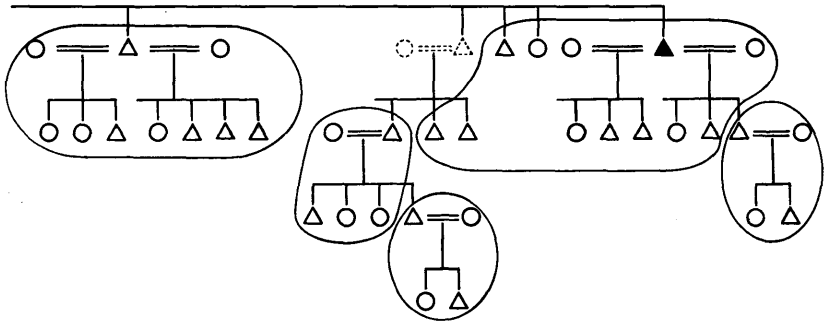
直系・傍系単核家族



直系複核家族



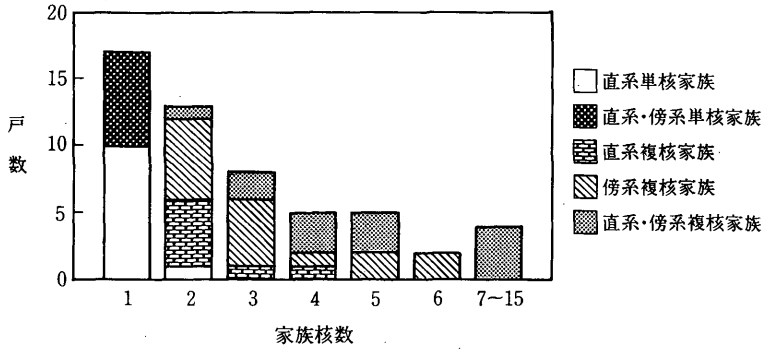
傍系複核家族



直系・傍系複核家族

注）▲＝「家長」
破線で表わされた婚姻関係では，配偶者と死別あるいは離別。
破線の◌△は死亡，あるいは他の理由でこの「家族」に所属していない。
◯で囲まれているのが，ひとつの「家族核」である。

図4　類型別による家族の形態



注）理論的には「家族核」が2つの「直系・傍系単核家族」はありえないが，ここでは親族ではない農業労働者が住み着いて，「家長」とは別に自分の「家族核」を形成しつつ，社会・経済的には「家族」として独立していない例があったので，これは「家族核」が2つとみなした。しかしながら類型上は，あくまでも親族関係をもとにしているので，「家族核」が2つあっても「直系・傍系単核家族」である。

図5　家族の類型と家族核（総数＝54戸）

典型的なタイプでは，「家長」の他に，その息子や甥などが「家族核」を形成している。なかでも，直系親族はひとつの「家族核」だけからなり，傍系親族がその他の「家族核」を形成する「傍系複核家族」の割合がいちばん多く，全戸の29.6%に相当する。ただし7つ以上の「家族核」からなる「家族」では，直系親族と傍系親族が複数の「家族核」を形成する「直系・傍系複核家族」のタイプしかみられない。

残りのおよそ3分の1の「家族」は，ただひとつの「家族核」からなる。親子関係がひとつという点では，西欧先進社会のいわゆる核家族にちかいといってもよい。これらは「直系単核家族」と「直系・傍系単核家族」に分類される。前者は全戸の20.4%にあたり，基本的には「家長」とその妻，およびその子供，まれに「家長」の母から構成される。後者はさらに「家長」の兄弟，甥や姪などの未婚の傍系親族を含んでおり，全戸の13.0%を占める。

類型別にみた「家族」の規模にはきわめて大きなひらきがある。「家長」だけが「家族核」を形成する「直系単核家族」では，平均家族成員数は7.5人である。「直系・傍系単核家族」と「直系複核家族」ではおよそ10人／戸であり，全体平均の18.6人／戸よりも小さい規模である。「家族核」は4つ以上になることはない。他方，「家族核」の数が最高15にもおよぶ「傍系複核家族」と「直系・傍系複核家族」では，前者が全体平均をわずかに上回り，後者が全体平均のおよそ2倍の規模をもっている。

以上のことをまとめると，大規模な「家族」の実態とは，直系親族と傍系親族の「家

族核」を含む「家族」のことであるということができる。

Ⅳ-3-c　家長のタイプ別による類型

ソニンケ社会と出稼ぎの特徴についてすでに述べてきたように，「家長」が自分自身や家族成員の出稼ぎをとおして，従来の役割や権限をとりもどしたという前提にもとづくと，社会的な責任が大きく，経済力もある「家長」のもとには多くの親族が集まってくるのは当然だと考えられる。また，「家長」が出稼ぎや農業など多様な生活手段を実現しようとすると，やはり多くの人員を確保しておく必要がある。年齢をかさね「家長」の社会的な責務が大きくなり，婚姻形態にも変化が生じるなかで，「家族」の形態も変わってゆく。

「家族」の規模は「家長」の年齢とともに大きくなってくる（図6参照）。49歳までは家長の扶養家族は平均9.2人だが，家長が出稼ぎ先での停年をむかえ帰村する年齢で，同時に農村社会において責任をもつ年齢階梯である50歳代になると，「家族」の規模は急に拡大する。60歳代では平均30人／戸以上の「家族」を形成している。この拡大は娘や姪が結婚して生家を離れるまで続く。息子や甥は結婚しても「家長」の屋敷地に残るので，「家族」は，1人の既婚男性を中心とした発展周期でとらえるよりも長い時間のなかで発展を続けると思われる。

「家族」のタイプを「家長」の年齢別にみると，「家長」の年齢が高くなるにした

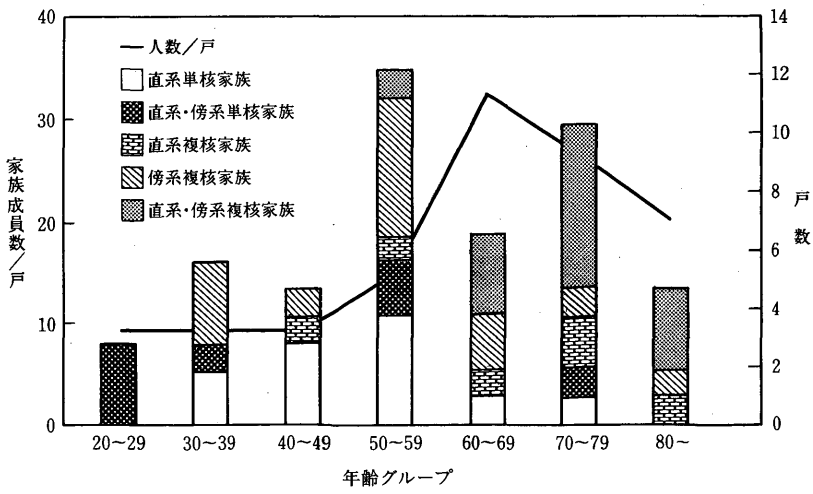


図6　家長の年齢別による家族の規模と類型（総数＝50戸）

がって，すなわち「家長」の社会的な責任が重くなるにしたがって「家族」はまず直系子孫の数を増し，つぎに傍系親族の数を増やしながら拡大してゆくことがわかる。図6では，家長が50歳以下の場合は単核の「家族」が多数を占めているのに対して，50歳をこえると傍系親族の「家族核」を含んだ複核の「家族」がのびてくるようすが確認できる。

つぎに「家長」の婚姻状況をみてみよう。セネガルでは民族のちがいにかかわらず，結婚は社会的義務のひとつである。生涯，独身でとおす男女は皆無に等しい。配偶者に死に別れた場合も，何らかのかたち[30]で再婚するのが一般的な習慣である。イスラム社会では一夫多妻制が認められ，複数の妻をもつことは農村生活における労働力を確保することに加えて，男性にとっては社会的，宗教的な価値観にもとづいた行為でもある。同時に，一般的には経済力がなければ，複数の妻とその子供たちを養うことはできない。したがって年齢を増し男性の社会的な責任が大きくなり，ある程度の経済力をもつようになると，一夫一婦から一夫多妻に移行する傾向が顕著である[31]（図7参照）。

「家族」の規模は寡夫，一夫一婦，一夫多妻の順で大きくなる（図8参照）。「家長」が一夫多妻の「家族」では妻と子供の数が多くなるので規模が大きいのはあたりまえである。しかしながら，複婚では一夫二妻がいちばん多いにもかかわらず，「家族」

30）セネガルではイスラム教の普及によってレヴィレート婚が崩れて再婚が一般的になっているといわれているが，本調査ではその区別はしなかったので，女性の再婚状態が実際の再婚なのかレヴィレート婚なのか不明である。しかしながら，調査村ではレヴィレート婚の存在を否定することはできない。婚姻と生殖の動向に関するサンプル調査では，女性の結婚回数の平均よりもパートナー（子供の父親という意味）の数の平均がわずかに多い（それぞれ1.2人と1.4人）ことがわかっており，それは人々がレヴィレート婚を再婚として認識しておらず，結婚回数に数えなかったためだと結論づけることも不可能ではないからである（未婚の母はほとんどいない）。もっとも人々がレヴィレート婚を強く意識していたら，子供の父親の名前を質問しても死者の名前があがってくるだけで，結婚回数とパートナーの数にはちがいがあらわれないだろう。パートナーの存在については，全戸の世帯調査から確認しているため死者の子供が生まれているという結果にはなっていないが，上記の2つの質問結果だけからは，レヴィレート婚について正確なことはいえない。レヴィレート婚については和田[1988]を参照。

31）本稿ではくわしく述べないが，一夫多妻制は社会的な価値観のみから選択される婚姻形態ではない。むしろ，すべての成人男女が結婚する社会では，生涯における一時的な婚姻形態である。ガンデ村の例にもあらわれているように，サハラ以南アフリカの諸社会では女性の初婚年齢は低く，男性は経済的な制約のためになかなか結婚できないので晩婚である。そのために結婚適齢期の男女の数が不均衡になってしまう。そのうえ夫を失った女性は，年齢に関わらずほとんどが何らかのかたちで再婚するので，婚姻市場ではつねに男性の数に比べて女性の数が多いという状況になる。したがって，一夫多妻制は配偶者間の年齢差によって年齢構造的につくられる婚姻形態であるともいえる。ガンデ村の男女の婚姻状況をみると，年齢にしたがって男性が一夫一婦から一夫多妻へ移行するのと同じように，女性も一夫一婦の夫の妻から一夫多妻の妻へと移り変わっている。ただし両者の推移には15年内外のひらきがあって，それはちょうど配偶者間の年齢差に相当している。

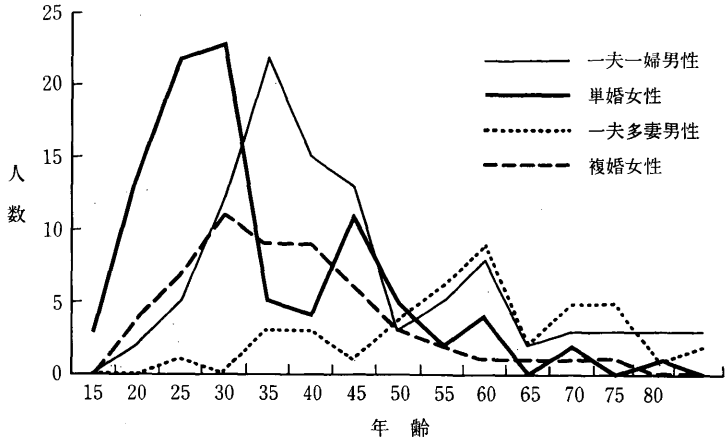


図7　年齢別による15才以上男女の婚姻状況（総数＝596人）

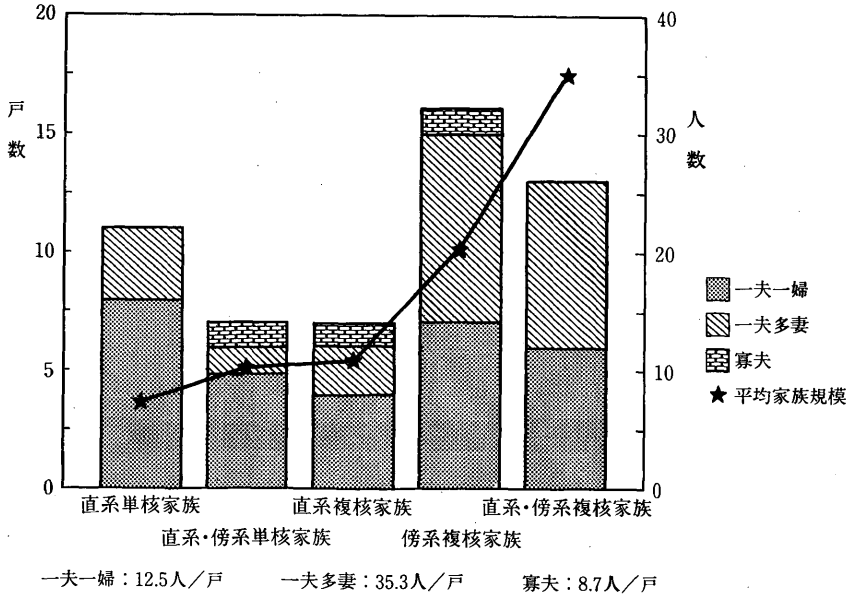


図8　家長の婚姻状況別による家族の規模と類型

の規模は一夫一婦の場合（12.5人）のおよそ3倍に相当する。本来ならば，妻とその子供の数だけ，すなわち特別な理由がないかぎり2倍になると考えるのがふつうであろう[32]。つまり一夫多妻制という婚姻形態のもとでは，たんに子供の数が増えるだけではなく，「家長」に依存して生活する親族が増えていることを意味する。いいかえれば，「家族」の規模が人口的な要因よりも社会的な要因によって大きく左右されて

いるということである。このことは「家族」のタイプにもあらわれている。「傍系複核家族」と「直系・傍系複核家族」では「家長」の婚姻形態は一夫多妻が多く，規模の小さいその他のタイプでは一夫一婦が多い。

以上のことからつぎのような全体的な傾向を述べることができる。複核からなる規模の大きい「家族」では「家長」の年齢が高く，婚姻形態も年齢に応じて一夫多妻が多くみられる。また大規模な「家族」は，ソニンケ人の下層身分の特徴でもある。民族別にみると，ソニンケ人では「傍系複核家族」および「直系・傍系複核家族」がソニンケ人の家族の60%を越えているのに対して，アルプラー人の「家族」は，70%以上が家族成員数が村全体の平均にみたない「直系単核家族」，「直系・傍系単核家族」あるいは「直系複核家族」のタイプに属する。身分別では「旧捕虜」において「傍系複核家族」と「直系・傍系複核家族」が70%以上を占めている。他方，「自由民」では同タイプの「家族」は半分以下である。さらに，出稼ぎ民の数[33]はそれぞれの類型ごとに特徴を示し，「家族」の形態が拡大すると出稼ぎ民の数も多くなっている（図9参照）。

結局のところ，年齢の差異から読みとれる民族や身分による「家族」の形態のちが

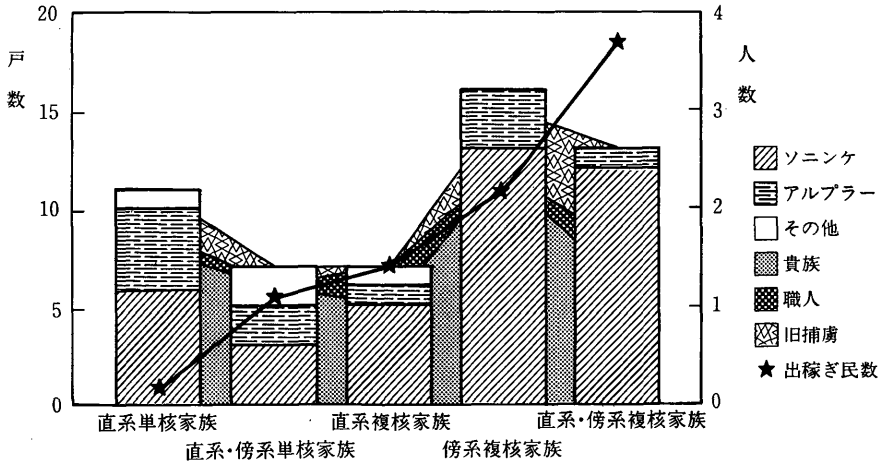


図9　民族／身分別による家族の類型（総数＝54戸）

32）もちろん婚姻形態のちがいによって女性の生殖能力が大きく変わるというわけではない。もし変わるとしても，一夫一婦の夫をもつ女性のほうが，一夫多妻の夫をもつ女性よりもわずかに完結出生率は多い [CHARBIT, GUEYE et NDIAYE 1985] というのが，過去のセネガルにおける人口調査での結果である。

33）ここでは，出稼ぎに行ったと思われるが出稼ぎの初期段階で職を得ていない者，および出稼ぎ以外の理由で村にいない者など，無収入で他出中の者も含む。

いは，民族や身分によって「家長」の権限の程度がそれぞれの「家族」においてことなることに関係すると思われる。ソニンケ社会は年齢による序列が非常に明確である。そのような社会において，年齢が高いということはより大きな権限をもっていることを意味するのである。つぎに民族と身分別に「家長」の就任経緯とその時期，および平均年齢に注目して，「家長」の権限が「家族」の形態と深い関係にあることを検証する。

ソニンケ社会においては，「家長」が年老いて引退したり，死亡した場合に，父系親族のなかから最年長の男性が「家長」の地位を継承することになっている。ソニンケ人で「家長」に就いている39人のうち，94.9%は先代からの相続である。一方，アルプラー人とその他の民族では，相続と創立はそれぞれ同じ割合である（表7参照)。身分別にみると，「自由民」では創立が27.8%，「職人」では20%であるが，「旧捕虜」では9.1%となる（表8参照)。

つぎに就任中の「家長」の平均年齢をみると，ソニンケ人では62.6歳で，就任年齢は38.8歳である。アルプラー人では「家長」の平均年齢は45.5歳，その他の民族では48.8歳となっている。就任年齢はそれぞれ30歳程度である。ソニンケ人では70歳で初めて「家長」になる者がいるのに対して，アルプラー人では遅い人でも44歳である。また身分によるちがいも明らかで，「家長」の平均年齢は「自由民」では53.7歳であるが，「職人」と「旧捕虜」ではそれぞれ66.8歳と69.4歳である。一方，就任年齢に大きな差異はなく，どの身分でも35歳前後である。

「家族」の類型別に「家長」への就任年齢をみてみると，「家長」の年齢が高い「直系・傍系複核家族」では平均就任年齢は42.3歳である。「傍系複核家族」はそれよりわずかに低い（39.7歳）だけだが，その他の規模の小さいタイプでは10歳程度のひらき（31.2～33.8歳）がある。すなわち，今日，規模の大きいタイプの「家族」を形成している「家長」は，年齢も高いが，「家長」に就任した年齢も遅いのである。また，

表7　民族別による家長への就任経緯
（総数＝53人）

	相続	創立*
ソニンケ	37	2
アルプラー	5	5
その他	2	2
合計	44	9

*創立には移住の場合も含む。

表8　身分別による家長への就任経緯
（総数＝52人）

	相続	創立*
自由民	26	10
職人	4	1
旧捕虜	10	1
合計	40	12

*創立には移住の場合も含む。

調査時点において平均就任年齢に達していない若い年齢層の「家長」をみると，このなかで20歳以下で就任した者はだれもいない。かつては「家長」の権限の譲渡はより若い年齢でおこなわれていたが，今日では「家長」への就任も遅いうえに，その地位はより長く1人の人間によって保持される傾向にある。

このことは，民族と身分のちがいによってより明確にあらわれている。ソニンケ社会ではひとりの男性が長く「家長」にとどまるために，その他の既婚男性はなかなか「家長」の地位を継ぐことができない。年齢的な序列が明確であり，最年長者の「家長」は絶対的な権威をもっている。一方，アルプラー人やその他の民族では，「家長」の次期候補者が地位を継承するのは比較的に容易である。身分別では，「職人」と「旧捕虜」において，「自由民」に比べて「家長」になるために年齢的な制限が大きい。「自由民」の社会・経済的な背景は，既婚男子が若くして独立し「家族」を形成するために有利な条件を与えている可能性がある。「自由民」は，農村の農業生産システムが変容したあとも，伝統的に所有していた特権をすべて失ったわけではない。他の身分の者たちと同じように出稼ぎに行っても，そこにはかつての農業生産システムによって規定されていた階層間の関係が持ち込まれ，「自由民」は低階層の身分の者から贈り物を受け取るなど，何らかのかたちで伝統的に所有していた特権の恩恵に浴していると思われる。一方，「職人」や「旧捕虜」の身分では，出稼ぎ民の数に象徴されるように経済的により大きな困難を抱えており，「家族」が結束して困難に対処しなければならなかった。それゆえ，年少の既婚男子が「家族」を代表するような状況にはなりえなかったと考えられる。

これまで述べてきたことは，「家族」の形態は「家長」がもつ社会的な特徴，とくに「家族」内部における「家長」の地位の強化と，身分のちがいにあらわれるような階層的経済条件に強く影響されているという点である。いいかえれば，「家長」への就任は，男性の「家族」内外における社会関係と経済力に左右されるということである。そこで，既婚男性がもつ社会・経済的な条件によってはひとつの生計単位となりうる「家族」の構成要素，すなわち「家族核」に注目することが，「家族」の形態をみるうえで重要になってくる。

V　「家族核」をめぐる分析

「家族核」は，すでに定義したように，生物学上の親子を中心にした分析上の単位である。西欧先進社会では「家族核」それ自体が「家族」とほとんど同義であるのに

対し，サハラ以南アフリカの諸社会では，「家族」の構成要素である「家族核」は生産と消費の単位として独立しておらず，「家族核」の自立性は社会的にも経済的にも低い。すでに述べたように，気象条件の悪化や成人男子の出稼ぎによって伝統的な農業生産システムは崩れた。かつては自分の田畑を与えられ，ある程度の経済的自由を享受していた成人男性は，出稼ぎが「家族」内の主要な農業労働力を吸収してしまうと，個人田畑より「家長」の田畑を優先して「家族」のための食糧を生産しなければならなくなった。また，出稼ぎが成人男性にとって一種の「通過儀礼」となったことで，年齢上の序列はさらに強化され，既婚男性が父や兄の「家族」から独立することは難しくなった。このような既婚男性の社会・経済的な立場の変化は，「家族」のなかにおける「家族核」の自立性を大幅に縮小した。「家族」は「家族核」を包括して生計を立てる算段を練り，「家族核」もまた「家族」という生活集団のなかで社会・経済的な安定を得る。したがって「家族核」がおかれている社会・経済的な状況は，「家族」の形態を決定する重要な要因であるといえよう。以下，ソニンケ人の「家族核」を中心にその特徴をみてゆくことにする。

V-1　中心と周辺

「家族」は平均3つの「家族核」から構成されている（図10参照）。ただしソニンケ人ではその平均はほぼ4つであり，それ以外の民族では2つ以下である。一部の特大規模の「家族」（「家族核」が6から15）をのぞくと，90%の「家族」が5つ以下の「家族核」から成り立っている。また，ただひとつの「家族核」からなる「家族」は

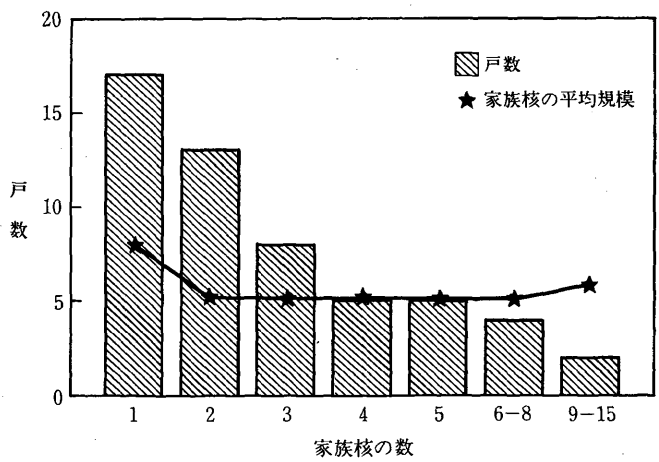


図10　家族核の数による家族規模（総数＝54戸）

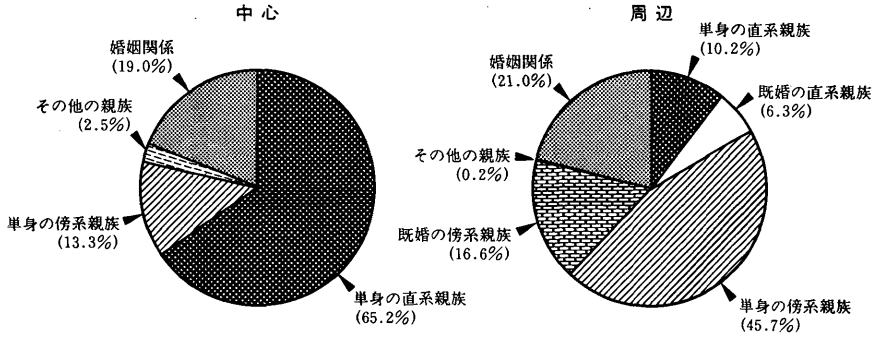


図11　家長との親族関係／家族核別による人口（総数＝1002人）

30%にのぼる。この形態には親子関係がひとつしかないが，多様な親族関係の構成員から成り立っており，その意味で西欧社会のいわゆる核家族とはことなる。

ソニンケ人では「家族核」を構成する平均成員数はほぼ6人であり，総体的にみると，父と母，それに4人の子供という構図が想定される。しかし，「家長」が「家族核」の父＝夫（まれに母）となっている「中心的家族核」と，「家族」のなかでは「家長」の扶養家族の位置にある「周辺的家族核」では，その成員数にちがいがある。前者では8人強であるが，後者ではそれよりも3人程度少ない。すでに述べてきたように，「周辺的家族核」では父＝夫（あるいは母）となる者が特別な社会・経済的責任をもたないのに対し，「中心的家族核」では最年長者で最高責任者としての「家長」を父＝夫とする。最年長者としては，子供の数が多いのは，避妊手段をほとんど用いることがないため年月の経過として当然である。しかし，「中心的家族核」の成員数が多いのはそのせいばかりではない。「家長」の最高責任者としての立場から，「家長」のもとには妻子以外の者が集まってくる。「中心的家族核」の構成は「家長」とその妻子が82%を占めるが，その他は「家長」の甥（5.7%）や弟（3.6%）などである。また「家族」のなかに親子関係をもたない里子や，子供をもっていない出戻りの娘などは，「家長」の直接の扶養家族となって「中心的家族核」に所属するのが一般的である[34]（図11参照）。

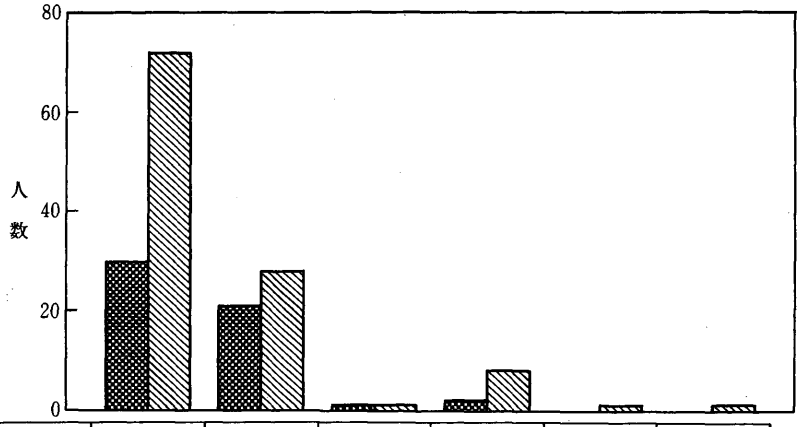
V-2 「家族核」を形成する者

ソニンケ社会もアルプラー社会も父兄出自からなるクランおよび「家族」を構成す

34）里子やその他の親族などの場合には，「家族」の誰を頼って来たのか，誰のもとで日々の食事や労働をおこなうかを確かめることによって，所属する「家族核」を決定した。

る。調査村では「家族核」は90%以上が父＝夫を中心として形成されている。女性が「家族核」を形成するのは，夫はいないが子供がいる場合である。多くは夫を亡くした女性であり，離婚女性や未婚の母が中心となった「家族核」は2.3%にすぎない。イスラム教にもとづいた伝統的な価値観は，結婚をひとつの社会規範としてすべての成人男女に義務づけ，一夫多妻制をみとめている。女性は早婚，男性は経済的な制約ゆえに晩婚の傾向がある。そのため配偶者間の年齢差が大きく，若くして寡婦になる女性がいる。寡夫が高年齢層でのみみられるのに対し，寡婦は22歳からすでに存在する（図7参照）。そのことが女性が中心となった「家族核」を10%という無視できない割合にしているが，成人女性が独り身でいるのは好ましくなく，死別や離別で夫を失うと，何らかのかたちで再婚状態になるのが一般的である。したがって結婚していない成人女性は絶対数が少なく，かつ生涯における一時的な状況として存在する。「家族核」は男性が中心となって形成されて，完全なかたちとなる。

婚姻形態に関しては，「中心的家族核」では一夫多妻制のもとに結婚している夫婦の割合が70%と高い。一方，「周辺的家族核」では反対に一夫一婦制が60.7%である（図12参照）。「家長」の最高責任者としての立場を考慮すると，一夫多妻制は年齢とともに課せられる「家長」の社会・経済的な責任ある立場を象徴している。そして「周辺的家族核」を形成する者は，婚姻形態からはまだその多くが社会的に一人前であるとは認められない状況にある。



婚姻状況	一夫一婦	一夫多妻	寡　夫	寡　婦	離婚女性	未婚の母
中心	30	21	1	2	0	0
周辺	72	28	1	8	1	1

図12　中心と周辺別による家族核を形成する者の婚姻状況（総数＝168人）

V-3 「家族核」の社会・経済上の営み

「家長」の権限が絶対的なソニンケ社会において，「中心的家族核」に所属して「家長」のもとで生活することと，「周辺的家族核」に所属することでは，人々の生き方にちがいはないだろうか。すでに述べてきたように，「家族」には「家長」をトップにした年長者から年少者までの序列がある。「家族核」もまた，その序列にしたがって「家族」の営みに参加するのではないかと予想される。

まず出稼ぎへのとりくみに関しては，就業可能年齢（15歳から59歳）に占める出稼ぎ民の割合から，中心と周辺の差が明らかである。前者では39.0%であるのに対し，後者では61.0%におよんでいる（図13参照）。

つぎに家族成員の就学率をみると，「中心的家族核」の子供は教育を受ける機会が多いことがわかる。調査時点で何らかの教育を受けていた者は最年少者では4歳，最年長者では24歳だった。この年齢層に入る子供全員を対象にすると，小中学校に通っている児童の割合は「中心的家族核」で33.3%であるのに対し，「周辺的家族核」では20.5%である。その他の伝統的な宗教教育などにおいても，わずかに「中心的家族核」の子供が優遇されている（図14参照）。

以上のことから，「周辺的家族核」は「家長」の保護と管理のもとに生活する一方で，出稼ぎへの実質的な労働力を提供していることがわかる。農村に残った者は農業や家事に従事するが，その労働力の多くは周辺から供給されている。そのため「周辺的家族核」では子供たちも労働に参加し，教育を受ける機会が少ない。出稼ぎが主た

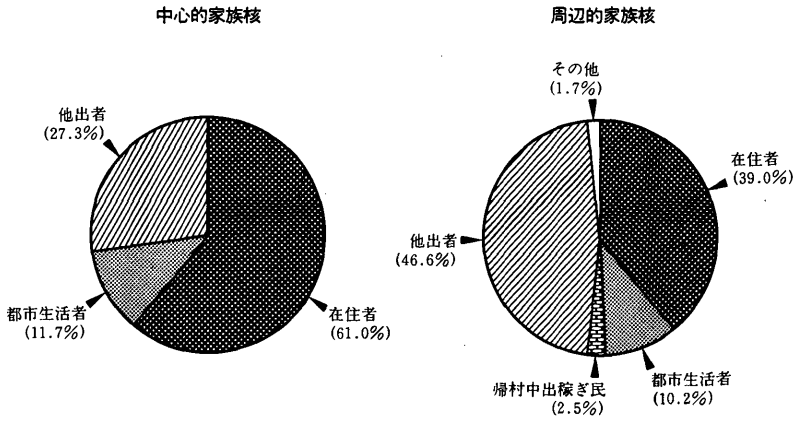


図13　家族核／居住状況別によるソニンケ人の就業可能年齢（15-59歳）男性（総数＝195人）

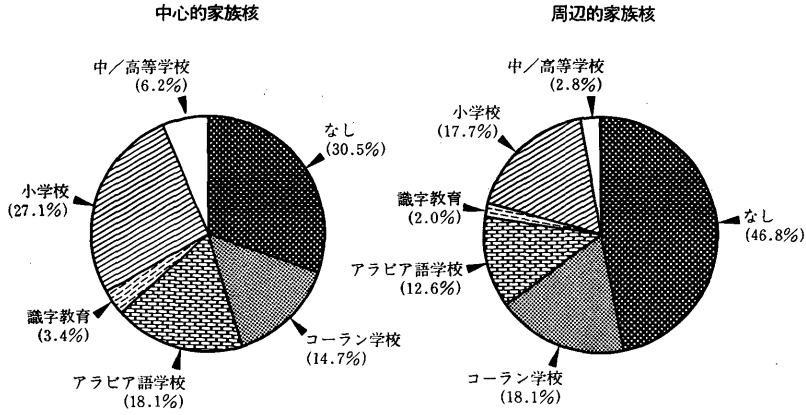


図14　家族核別による4～24歳の子供の教育状況（総数＝431人）

る生活手段になってから，かつて伝統的な農業生産システムにみられたある程度の経済的な自立性を，「周辺的家族核」はもつことができなくなった。出稼ぎをとおして，「家長」が金銭を一括して管理するようになったからである。年少者は「家族」とすべての年長者のために労働を提供しなければならない。独身男性は，自分より年長者が結婚するまでは，その婚資をつくる手伝いをしなければならない。出稼ぎが「家族」の助けを必要とする世代リレー式におこなわれているかぎり，この年齢上の序列は変わらないと思われる。そして「家族」における「周辺的家族核」の位置も，何らかのかたちで既婚男性が経済的自立を得ることができなければ，このまま維持される可能性が高いと思われる。

Ⅵ　「家族」に関する総論

調査村における「家族」の特徴はまずその多様性である。「家族」の成員数はすでにみたように，最少2人[35]から最大は102人におよんでいる。規模の大きい「家族」はその数においてだけではなく，家族成員と「家長」との親族関係の多様性においてもその広がりをみせている。半数以上（37戸）が，2つ以上の「家族核」をもつ複核家族である。いちばん規模の大きい「家族」では15の「家族核」が存在する。「家族」

35）　マリ出身の男性とその男と結婚した村の女性である。男は結婚前からその女性の居住する屋敷地に間借りをしていたのだが，結婚後，妻の「家族」といさかいがあったため，その屋敷地を出て自分の「家族」をつくることになった例である。

の規模が大きくなると，傍系親族の割合が増える。一方，規模の小さい「家族」では「直系単核家族」が，全戸の3分の1を占めていることも指摘しておく必要がある。そのうちの10戸は生物学的な親子のみからなる完全な核家族である。

ソニンケ人の「家族」は平均的にみると，4つの「家族核」をもち，22.4人から構成されている。「家族」の平均的な構成はつぎのとおりである。まず在住の家族成員のおよそ40.2%（9人）が15歳未満の子供で占められている。15歳から59歳の就業可能年齢にいる男性は「家族」の22.5%（5.0人）に相当するが，そのうち村に在住している者は半分以下，全体の10.7%（2.4人）にすぎない。同年齢層の女性は「家族」の25.0%（5.9人）を占め，その87%は村に在住している。「家族」のなかで，何らかのかたちで他出中の者は男女合わせて21.1%（4.7人）いるが，かれらがみな経済活動に従事しているわけではない。若い男性にとって，出稼ぎという名目で故郷を離れることはある種の冒険でもある。それが無責任な冒険心からではなく，家族成員としての義務と責任からおこなわれたとしても，かならず職を得ることができるとはかぎらない。女性の場合は，たんなる親戚への訪問が多い。したがって，「家族」のために経済的に貢献し得る出稼ぎ民は家族成員の11.4%（2.6人）にすぎない。

教育面では，調査時に就学年齢（8歳から15歳）に達していた全児童のうち，1戸あたり少なくとも1人の子供は学校教育を受けていた。一世代前（調査時の年齢が16歳から25歳）の子供たちの就学率は2戸に1人，そのまた一世代前（調査時の年齢が26歳から35歳）では5戸に1人，36歳以上の世代では10戸に1人の割合であった。調査時点において何らかの教育を受けていた子供は4歳から24歳までみられた。この年齢層はソニンケ人でもアルプラー人でもほぼ一致しているが，ソニンケ人では何らかの教育を受けていた子供は全体の59.9%であるのに対し，アルプラー人では39.1%であった。前者では，伝統的な宗教教育がわずかにまさるものの，フランス語教育をおこなう学校教育を受けている子供も25.8%とかなりの数になる。しかし後者では学校教育への選択は3.3%と低い。ガンデ村の小学校教師が指摘したように，出稼ぎがもたらした社会変容は，親たちに子供への教育の必要性を認識させたにちがいない[36]。また，出稼ぎの導入によって農業は主要な生活手段ではなくなったため，子供たちが学校へ通う時間的な余裕が生まれた。

36）しかしながら，すべての子供が教育を受ける設備はなく，同時に親たちの意識にも，子供を学校へやるべきか，それともなるべく早い時期から「家族」のために実践的な労働力になるように育てるかという迷いがあることも確かである。結果として，学校の途中放棄はかなり頻繁である。現在のところ学校教育は，フランスへ出稼ぎにゆくための必要最低限の読み書き能力を得る手段としての域をでていない。

「家族」の生活の戦略が上記の平均的な家族構成に読みとれる。「家族」は，一方で農作業において女性の労働力に頼り，他方で出稼ぎ民からの仕送りをあてにしている。「家族」はまた，ささやかながら子供の教育への投資もおこなっている。「家長」は出稼ぎをとおしてその地位を強化し，農村に残った家族成員に対してより大きな責任と影響力をもつようになった。成人男性，とくに既婚男性の多くが出稼ぎにゆくことにより，その妻や子供たちは自分の夫や父ではなく，直接に「家長」のもとで生活する。「家長」は出稼ぎ民の妻子へのより大きい関与をつうじて，単身で出かけた出稼ぎ民が外国で生活の基盤をつくり農村への帰属意識を忘れてしまうことのないよう配慮を怠らない。

「家族」の形態は民族による差異が明らかである。しかしながら，「家族」の形態は民族固有の何らかの決定要因をもちながら，「家族」が村へ住み着いた時期や，出稼ぎ民によって保障される経済的な側面など，「家族」をとりまく社会・経済的な状況に影響されている。

「家長」の地位の強化は「家族」の形態に大きな影響を及ぼしている。出稼ぎによって権限を復活した「家長」は，生活のさまざまな機会において家族成員への管理を強めている。「家族」が拡大するか，あるいは分裂するかは，「家長」の権限が家族成員にどの程度及んでいるかに関係すると思われる。とくに，「家長」と出稼ぎ民との社会関係が，従来の年齢的な序列とあらたな経済的な利害関係において，どのような展開をみせるのか注目してゆくことが重要である。

他方，出稼ぎそのものの影響，すなわち外的な要因もみのがせない。ほとんどの出稼ぎ民は長年の外国での生活を終えたあと，ふたたび村で生活をはじめる。農村社会にもどって葛藤や軋轢を生じることなく生活してゆくためには，村の社会規範を守る必要がある。しかし外国でことなる価値観に接した人々は，以前と同じように農村社会の伝統を尊重しつづけてゆくことができるのか疑問である。個人の経済力が帰属社会の管理を受けなくなったとき，個人の意識も大きく変化する可能性をもっている。また出稼ぎ先での経験，たとえそれが村落社会の延長であっても，共同生活のなかで村の開発のためにプロジェクトを策定するという経験は，人々の考え方を変えないだろうか。そこには，あたらしいアイディアを実現させるという，従来の社会の運営のなかではでてこなかったような役割が存在する。それが伝統的な権力構造との関係においてどのように社会に包括されるのか，注目する必要がある。まったく価値観のことなる西欧社会において，生産や生殖に関する考え方にも少なからず影響を受けるはずである。一方，出稼ぎ先の移民政策も，妻子を呼び寄せるか，単身で働くかといっ

た選択に大きく関わり，農村社会の「家族」の形態を変容させ得る要因である。

「家族」が主たる生活手段としていかなる生業を営むのかという点も，「家族」の形態を決定する大きな要因である。「直系単核家族」では出稼ぎ民は家族成員の2.4%にすぎないが，他出中ではあるが仕事に就いていない者が11.8%いる。出稼ぎは補助的，あるいは将来的見通しのなかでおこなわれており，「家族」の生計は農業を中心としながら村に在住している者たちに支えられている。「直系・傍系単核家族」では成人男女の在住者の割合が多く，全家族成員のほぼ半分を占めている。また他出中の者の3分の2以上は経済活動に従事している。農業と出稼ぎが同時に生活手段として確立しているといえよう。「直系複核家族」になると，出稼ぎ民の割合が13.5%に増加する。他出中で無職の者は少なく，出稼ぎが主たる生活手段となっていることを示している。さらに規模の大きい「傍系複核家族」と「直系・傍系複核家族」では，無職の者を含めた他出者の割合が大きい。同時に，経済活動に従事している出稼ぎ民の割合も，それぞれ家族成員の10%以上を占め，出稼ぎは一方で冒険的な要素をもちながらも主たる生活手段になっている（図15参照）。

ここにあらわれてきた出稼ぎをめざしながらも経済活動に従事できない経済的に不安定な人々は，多くは若い成人男性である。だからこそ「家族核」に焦点をあて，父＝夫である男性や，結婚をひかえた男性がもつ社会・経済的な制約とその可能性について考察することが重要である。これらの男性が耕作地あるいは耕作権をもっているか，村の開発プロジェクトや共同体の諸問題に対して発言権をもつことができるか，それらとの関係からどのような経緯で出稼ぎが選択されたのかといった点が，成人男性が独立して生計を立てるうえで重要な条件になってくる。たとえば，灌漑農業は村人がその土地で生計を営むための希望的な農業形態である。今日では「家長」のみが灌漑の農業協同組合に加入し，一定の区画を耕作する権利を「家族」に対して得ることができる。しかし灌漑の規模が広がり，すべての既婚男性に加入権が認められたら（セネガルの灌漑農業プロジェクトではよくある例である），「家族」は「家族核」ごとに分裂して，「家族核」が「家族」として独立することによって，より広い親族に対して利益を受けることができるのである。

本調査からうかびあがってきたのは，アフリカの一地方において生き延びてゆこうとする家族のイメージである。ソニンケ社会は，伝統的な生産システムにおける社会関係を，あらたな生活手段である出稼ぎというう つわに移し替えることによって，今日の社会・経済的な環境に適応する道をみつけた。「家族」もまたそれを反映して，機能的な生活集団としてのかたちを模索している。

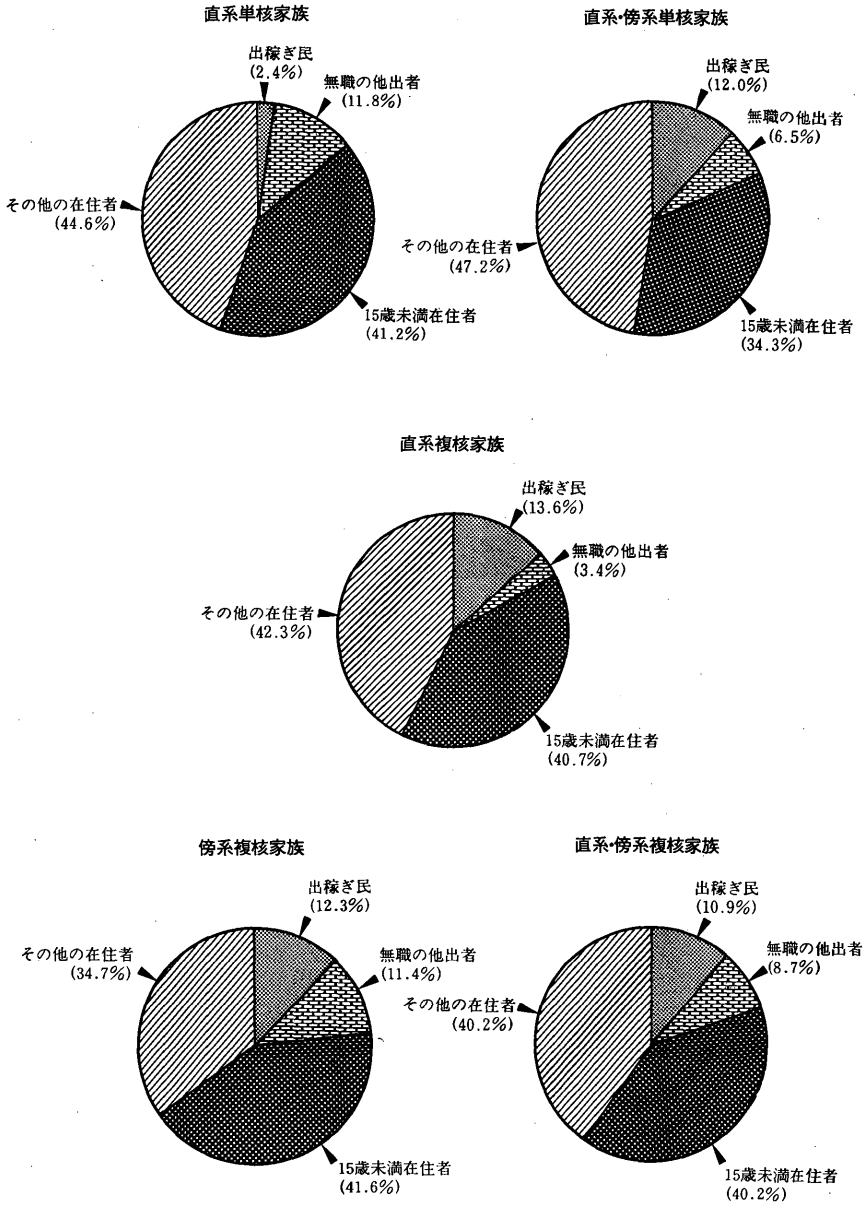


図15　居住状況／類型別によるソニンケ人の家族（総数＝873人）

ソニンケ社会の「家族」は，農村に残った家族成員だけをみれば，年齢的にも男女の比率からも非常に不均衡な構成になっている。しかし，ここでいう「家族」とは血縁や婚姻関係で結ばれた人々が，出稼ぎ先と故郷の村に分散しつつ，強い連帯意識をもちながら，1人の「家長」のもとにひとつの生産・消費単位を形成している生活集団のことである。村に残った女性と年少者，そして出稼ぎ先の男性，これらがひとつになって「家族」を形成する。「家族」のなかで独立した生産・消費単位を形成していた「世帯」は消え，「家族核」も経済的な自立性を失い，「家族」のかたちだけの構成単位となった。「家族核」は最高責任者である「家長」の権限のもとに，出稼ぎをとおしたひとつの大規模な「家族」の営みに参加している。ソニンケ社会における「家族」の強い連帯意識とはたんなる血縁関係によるきづなではなく，年少者による「家族」への労働提供と，年長者である「家長」による年少者への社会的保護との相互関係を意味している。

したがって「家族」は，従来，仏語で「concession」とあらわされていた，ひとつの屋敷地に居住する直系親族と傍系親族からなる経済的に自立した複数の夫婦単位を包括する生活集団とは厳密にはことなる。外見上の形態は同じでも，「家族」の機能と内部の社会関係が微妙に変化している。「家族核」の「家族」における自立性は縮小して，成人男性が独立したひとつの「家族」を形成する可能性は縮少した。しかしながら，それは必ずしも「家長」の権力を象徴とした伝統的な家族への回帰を意味するものではない。出稼ぎが農村の経済構造に組み込まれたことによるこのような変化は，出稼ぎを変化の外的要因として積極的に捉えることによって理解すべきである。調査結果から示された「家族」の形態は，出稼ぎを不可欠な生活手段とするあらたな社会・経済環境への「家族」の適応策のあらわれである。

本稿ではガンデ村における調査の「家族」に関する部分から，出稼ぎをめぐる社会変容の一例として「家族」について考察した。今日の「家族」の形態を決定する大きな要因として「家長」の権力に注目したが，それは出稼ぎをめぐって結果的に強化されたものであって，実際に「家族」の営みを支えているのは年少の成人男性である。世代間における微妙な社会・経済関係が「家族」と農村社会においてどのような展開をみせるのか，出稼ぎ形態や農業の将来，および成人男性がおかれた社会・経済的な立場に焦点をあてて，今後さらに考察を深めたい。

付　　記

本稿は1993年3月から4月にかけて，パリ第V大学とセネガルのサン・ルイ大学の共同研究としておこなわれた調査の成果の一部である。3年間のパリ留学，およびその間の海外調査を可能にしてくれた財団法人国際高等教育機構に感謝の念をあらわすとともに，寝食をともにして調査をしたサン・ルイ大学の学生をはじめ，ガンデ村の住民，とくにバレ・ンジャイ氏一家に，この場をかりてお礼を申し上げたい。

同館の諸先生方には，遅々と仕事が進まない私を辛抱強く見守っていただき，貴重なご教示を拝受した。ただし，ここに書いた内容については筆者，個人に責任がある。

文　　献

ADAMS, A.
1985 *La terre et les gens du fleuve: Jalons, balises.* Paris: l'Harmattan.
ANTOINE, P., P. BOCQUIER et autres
1995 *Les familles dakaroises face à la crise.* Dakar: IFAN, ORSTOM, CEPED.
BARRY, M.
1985 *Fonction des épithalames en milieu traditionnel Soninké.* Mémoire de fin d'étude, Conservatoire national de musique, de danse et d'art dramatique. Dakar.
BATHILY, A.
1972 L'ancien royaume soninké du Gadiaga. *Bull. de l'IFAN* sér. B 31 (1), Dakar.
BLOCH, P. C.
1991 L'avenir de l'irrigation dans la vallée du Sénégal vu d'une zone périphérique: Bakel. In B. Crousse, P. Mathieu et S. M. Seck (sous la dir. de), pp. 239–247.
CHARBIT, Y.
1987 *Famille et nuptialité dans la Caraïbe.* Paris: PUF.
CHARBIT, Y. et S. NDIAYE
1994 *La population du Sénégal.* Paris: CERPAA.
CHARBIT, Y., L. GUEYE et S. NDIAYE
1985 *Nuptialité et fécondité au Sénégal.* Paris: PUF.
COPANS, J.
1992 Sociologie de la connaissance du Sénégal. *Cahiers d'étude africaine 123* 31 (3), Paris: EHESS.
CROUSSE, B., P. MATHIEU et S. M. SECK (sous la dir. de)
1991 *La vallée du fleuve Sénégal: Evaluation et perspectives d'une décennie d'aménagements.* Paris: Karthala.
DAVID, P.
1980 *Les navétanes.* Dakar: NEA.
DESJEUX, D.
1987 *Stratégie paysannes en Afrique noire: Le Congo (Essai sur la gestion de l'incertitude).* Paris: Karthala.
DIARASSOUBA, V. -C.
1968 *L'évolution des structures agricoles du Sénégal: Le Déstructuration et restructuation de l'économie rurale.* Paris: Cujas.
DIOP, A. -B.
1988 *La famille Wolof: Tradition et changement.* Paris: Karthala.
DUMONT, R.
1962 *L'Afrique est mal partie.* Paris: Ed. de Seuil.

FAINZANG, S. et O. JOURNET
1988 *La femme de mon mari: Anthropologie du mariage polygamique en Afrique et en France*. Paris: l'Harmattan.
FOUNOU-TCHUIGOUA, B.
1981 *Fondements de l'économie de traite au Sénégal*. Paris: Silex.
GENDREAU, F. et B. LACOMBE
1977 Les données d'état, individuelles et collectives. *Sources et analyse des données démographiques* 3 (1), Paris: INED-INSEE-MINCOOP-ORSTOM.
IFORD
1986 *Bulletin de liaison de démographie africaine: Spécial Sénégal* 52. Yaoundé.
1987 *Bulletin de liaison de démographie africaine: Spécial Sénégal* 53. Yaoundé.
KANE, F. et A. LERICOLLAIS
1975 L'émigration en pays Soninké. *Cahier ORSTOM* sér. Sci. Hum. 12 (2):177–187, Paris.
LAVIGNE-DELVILLE, P.
1991 *La rizière et la valise: Irrigation, migration et stratégies paysannes dans la vallée du fleuve Sénégal*. Paris: Syros Ateliers du Développement.
LOCOH, T.
1988 Structures familiales et changements sociaux. In D. Tabutin (sous la dir. de), pp. 441–478.
1991 Structures familiales d'accueil des migrants et développement des structures familiales multipolaires en Afrique. *Migration, changements sociaux et développement*, Paris: ORSTOM.
松田素二
1995 「構造調整期の都市社会——出稼ぎ民コロニーの分散と U ターン現象——」『アフリカ研究』47: 33–48。
MEILLASSOUX, C.
1986 *Femmes, greniers et capitaux*. Paris: L'Harmattan.
MIYAJI, M.
1979 Emigration et société: Le processus des changements structuraux d'un village Kabyle. In S. Wada and P. K. Eguchi (eds.), pp. 105–130.
NDIAYE, A. R.
1986 *La place de la femme dans les rites au Sénégal*. Dakar: NEA.
NICOLLET, A.
1992 *Femmes d'Afrique noire en France: La vie partagée*. Paris: CIEMI & l'Harmattan.
小倉充夫
1995 『労働移動と社会変動——ザンビアの人々の営みから——』有信堂。
PISON, G.
1982 *Dynamiqye d'une population traditionnelle: Les Peul Bandé (Sénégal oriental)*. Paris: PUF.
POLLET, E. et G. WINTER
1971 *La Société soninké (Dyahunu, Mali)*. Bruxelles: Ed. de l'Institut de sociologie, Univ. Libre de Bruxelles.
QUIMINAL, C.
1991 *Gens d'ici, gens d'ailleurs*. Paris: Christian Bourgois Editeur.
RÉPUBLIQUE DU SÉNÉGAL
1993 *Dimensions sociales de l'ajustement: Enquête sur les priorités*. Dakar: Ministère de l'économie, des finances et du plan.
柴田徳衛・加納弘勝（編）
1983 『第三世界の人口移動と都市化』アジア経済研究所。
SY, M.
1991 Les raisons de migrer des Sénégalaises déterminées par l'appartenance ethnique et le statut social. *Population Sahel* 16: 29–35.

TABUTIN, D. (sous la dir. de)
1988 *Population et société en Afrique au Sud du Sahara.* Paris: l'Harmattan.
TOURE, M. et T. O. FADAYOMI (sous la dir. de)
1993 *Migrations et urbanisation au sud du Sahara: Quels impacts sur les politiques de population et de développement?* Dakar: CODESRIA.
TRAORE, S.
1985 Corpus Soninké: Parenté et mariage. Univ. de Paris I.
和田正平
1988 『性と結婚の民族学』同朋社出版。
WADA, S and P. K. EGUCHI (eds.)
1979 *Africa 1.* Senri Ethnological Studies 1, National Museum of Ethnology.
WEIGEL, J. -Y.
1982 Migration et production domestique des Soninké du Sénégal. *Travaux et documents de l'ORSTOM* 146, Paris.